千葉大学
「インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開」

令和５年度シンポジウム報告書

ターム制の効用と問題点

―メリハリをつけた学期制の可能性―

千葉大学国際教養学部

COLLEGE OF
LIBERAL ARTS
AND SCIENCES

ターム制の効用と問題点
―メリハリをつけた学期制の可能性―

はじめに

当シンポジウムは、文部科学省知識集約型社会を支える人材育成事業に、千葉大学が採択され、令和３年度より開始した取り組み、「インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開（II-BEAT）」が主催するシンポジウムであると同時に、千葉大学の全学FD研修会としても位置づけられています。

後ほどより詳しい説明がありますが、千葉大学では平成28年より、それまでのセメスター制に代わって、クォーター制に準拠し、夏休みや春休みもタームと捉える６学期制のターム制を導入しています。しかしながら学部によってターム制の取り入れ方が様々である現状があります。

その中で国際教養学部はII-BEAT事業を通して、週複数回の授業を含めてインテンシブに学ぶ「集約ターム」と、留学や学外での長期の活動を体験しやすい「セルフデザインギャップターム」とを組み合わせたメリハリのあるカリキュラムを構築し、ターム制の有効な活用方法を模索しています。

本シンポジウムではこのII-BEAT事業の活動報告をするとともに、クォーター制を全学的に導入した２大学の状況について講演をいただくことで、クォーター制やターム制についてその可能性や問題点を今一度議論しようということを趣旨としています。

目 次

趣旨説明　「千葉大学におけるターム制の導入とその目的　ターム制の効用と問題点」　01

小澤　弘明（千葉大学理事（教育担当））

事業報告　「国際教養学部II-BEATにおけるメリハリをつけたカリキュラム」　04

和田　健（千葉大学大学院国際学術研究院　研究院長・教授／国際教養学部長）

講演１　「神戸大学における２学期クォーター制：導入のねらいとその成果や課題」　11

近田　政博 氏（神戸大学大学教育推進機構　大学教育研究センター　教授／教養教育院副院長）

講演２　「南山大学のクォーター制：週22回開講授業の導入と運用、及びその教育効果」　17

岡田　悦典 氏（南山大学　副学長（学務担当）／法学部　教授）

パネルディスカッション「ターム制の可能性と課題」　25

パネリスト：
近田　政博 氏・岡田　悦典 氏・和田　健
小泉　佳右（千葉大学大学院国際学術研究院　准教授／全学教育センター）

モデレーター：
縣　拓充（千葉大学大学院国際学術研究院　特任講師）

千葉大学におけるターム制の導入とその目的
ターム制の効用と問題点

小澤　弘明
（千葉大学理事（教育担当））

千葉大学の教育担当理事を務めております小澤と申します。私は2013年度に千葉大学の全学の教養教育を担う普遍教育センター長に着任し、翌2014年から教育改革担当の副学長を務めました。

そのために、ターム制の導入については全面的にコミットいたしましたし、2016年に国際教養学部という千葉大学としては41年ぶりの新学部を立ち上げるときにも、新設学部ということを生かして当初から全面的にターム制を導入させていただきました。

そのターム制の全体をどのように考えるかについては、当初どのような意図と目的を持って、これを導入したのかを考えるのが最も適切だと考えますので、その導入時点に遡って少し話をさせていただければ幸いです。

ターム制導入の背景

千葉大学のターム制の全体像でありますけれども、2014年度に、当時の高等教育研究機構という全学の教育を司る組織の中で、全学的にターム制・クォーター制をどう導入するのかを検討して、最終的には2016年（平成28年）の４月から全学導入を行うことにいたしました（図１）。

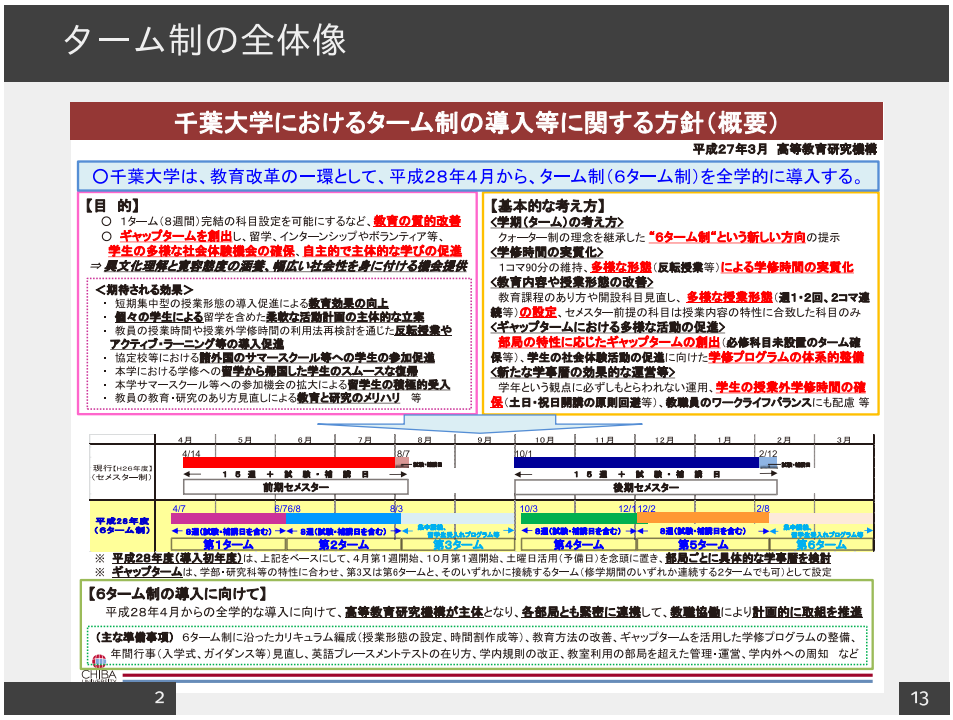

図１　ターム制の全体像

その目的と期待される効果、基本的な考え方、実際どのようにタームを設定するか、導入に向けていかなる問題を改善しなければならないか、全学的な体制整備にはどのような施策が必要かということが図１の中に入っております。これを基にして導入いたしましたので、以後の説明は、言わばこれをパラフレーズする形になり、ここに戻っていただければこの中に大体のことが全部書いてあるかと存じます。

さて、そのターム制導入の背景にはいくつかの教育改革の方向性がありましたし、現在もあると思います。一つは、元々クォーター制という「学事暦の柔軟化」という問題は、スーパーグローバル大学の創成支援事業の中で謳われたわけです。これは大学のグローバル化を進める際、当初は「秋入学」の制度が考えられていて、それが実現できないとなったときに、代わりにクォーター制の導入が進められたということであります。

ですので、ターム、あるいはクォーター型の科目設定によって短期集中の授業形態で教育効果を向上させるという目的に加えて、ギャップタームを創出して大学の国際化を促進することが大変大きな意図としてありました。つまり、留学やインターンシップ、ボランティア等の海外体験の機会を学事暦の中で確保することです。

2016年に発足した国際教養学部は、完全ターム制の中で、２年次の第２タームを「ギャップターム」という形で、必修授業を置かないことにいたしました。これは国際教養学部では全員が留学を必須にしていたことと関係しております。この問題は、2020年から今度は大学全体でENGINEプランというのが導入されまして、千葉大は現在大学全体で学部生・大学院生を問わず留学を必修にしておりますので、その原型という形でギャップタームの創出が行われたということであります。これら2014年度の制度設計と2016年からの導入の経緯が、図１には書かれています。

千葉大学のターム制の概要

千葉大学では「６ターム制」を採用しています。普通は夏休みや春休みだと考えられている期間を、第３、第６タームとして位置づけ、６ターム制をとってきました。集中授業やサマーコース、スプリングコースを念頭に置いています。

科目設定としては、通常考えられているものについては週１回、１ターム制で完結させる１単位授業。それに加えて週２回で２単位の授業。あるいは２コマ縦に連続して、週１回２コマ連続で１ターム完結の２単位授業。あるいは週１回で２ターム連続というセメスター制に近い形も授業内容の特性に応じたものは許容しました。ただし最初の１タームだけを履修することを可能にする制度設計になっています。

その結果、１ターム８週間が学生生活の基礎単位になるということで、この功罪はいろいろあると思います。短期集中型であって、当初は試験が多くなるとか、いろいろ議論もございましたけれども、現在ではそれがほぼ定着しております。また、後で出てくるかもしれませんが、その後いろいろ調整をして、現在では、あいだに１週間の「授業準備期間」を第１、第２、それから第４、第５のターム間に設けることを通じて、学生の方も次のタームの予習ができるし、教員も授業の準備をすることができるという形態を導入しております。

アクティブラーニングと留学

さらに申し上げれば、ギャップタームの創出だけではなく、その当時の問題関心で言うと、授業全体をアクティブラーニングに転換していかなければいけないという考えがありました。そのためには15

回延々と講義型の授業をやるというのではない授業形式を模索することが必要でしたし、ディシプリンの伝授を基礎とする授業形態ではなく、PBL（Project Based Learning）型というか、課題解決型の授業を増やしていく、これを通じて授業の形態と質を変えていくことが当初の目的にありました。これが成功したかどうかというのはまた別の問題ですけれども、そういう意図があったということであります。

それからもう一つは先ほど申し上げたように、海外体験の機会を増やすことに関連してギャップタームの時期をどう設定するかという課題がありました。国際教養学部のように専門についてはlate specializationを、海外体験については早期体験（early exposure）を重視する学部は、２年次の第２タームにギャップタームを設定していきました。逆に、専門の修得に時間がかかり、初年次教育に近いところにギャップタームを設けることはなかなか難しいという学部の意見もありました。そういうところは大体が修士課程・博士前期課程まで進学してから就職することが多いわけで、千葉大でいうと園芸学部、理学部や工学部など、そういうところでは実質６年制の教育になっていると言うことができます。そうした部局では、むしろ高年次の方にギャップタームを設定して留学機会を保障しようという考え方も生まれました。

このギャップタームが学生から見て実現したところと実現していないところがあるのが現状だと思いますが、元々は部局の特性に応じて柔軟にギャップタームを設定することが本来の意図として設定されていました。

教員に対するメリット

もう一つ、このターム制を導入することの教員に対するメリットは何かを議論いたしました。特にカリキュラム編成について、このターム制の導入を契機に教員間でいろいろ議論をしていただきたいということで、授業編成自体も教員が何を教えたいかという教員主体の授業編成から、学習者主体の授業編成に転換させることが目的でありました。知識教授型ではなくて、学習者の主体的活動を重視する、先ほど申し上げたアクティブラーニングやPBL型の授業など、そういう方向に転換させるということです。

同時に、ターム制の導入は、教員にとっては、年間を通じた「相対的研究専念期間」と仮に呼んでおきますが、こういうものを導入することにも繋がるわけです。学科やコースといった教育の基礎単位で教員間で相互に科目配置の調整を行い、かつ第３、第６タームに接続させれば、合計で16週ぐらいは研究専念期間を設定することができます。これは短期のサバティカル・リーブとも言えます。実際、千葉大学では部局によってはこういう形で相対的研究専念期間を積極的に活用している事例もあります。

まとめ

このように、千葉大学のターム制とギャップタームの導入の制度設計は、教育の国際化・グローバル化の推進、教育効果の増進、それから学生を主体とした教育の質の転換、そして教員の側の新しい教育についての理解の深化等を、全体として目的とする形で進められました。

これがはたして上手くいっているのかいっていないのかという話については、この後にいろいろと議論になるところでしょうが、当初、このような大きな教育改革の一環として、学事暦の柔軟化が構想されていたことをお伝えしたいと思い、お話させていただきました。ご静聴、ありがとうございました。

国際教養学部II-BEATにおける メリハリをつけたカリキュラム

和田　健
（千葉大学大学院国際学術研究院　研究院長・教授／国際教養学部長）

千葉大学国際教養学部の和田と申します。今回発表させていただきますII-BEATの実務的な取りまとめをしております。この事業が始まったのは令和３年度で、令和４年度から本格的に実施しております。その内容を中心にして、令和５年度の分についても口頭で触れながら事業報告をさせていただき、今日の後半のパネルディスカッションの題材として出していきたいと思います。

本報告のアウトラインですが４点ございます。１点目はII-BEAT事業の概要です。元々はこのDP事業（知識集約型社会を支える人材育成事業）で、授業科目を大胆に絞り込み、一定期間、精選された授業科目を週複数日実施し、密度の濃い学習を実現するということで、学事暦を触りながらより柔軟な形でプログラムを展開していくメニューⅢに採択いただきました。千葉大学では「インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開」、II-BEAT（ツービート）と言っておりますが、この概要についてお話していきます。２点目に、そもそもこの国際教養学部でこのII-BEATを、どのようにやっているか、ターム制の効果的な活用と全学的な水平展開についてどこまで結論が出せるか、それから全学に提案ができるかどうかを試しているということです。３点目に、これが事業報告になりますが、2022年度の実施状況を中心に2023年度のことをお話させていただきます。そして４点目に今後の課題ということで、パネルディスカッションに繋がる内容のことをお話して締めくくりたいと思います。

II-BEATの全体像

まず、II-BEAT事業の概要ですけれども、II-BEATはイシューベースの教育ということで、ディシプリンから入るのではなく、まず課題を見つけて、それに関わっていく複数のディシプリンは何かを考えていくことでカリキュラムを構築していくことを考えています。

主に学事暦等をいじることで２点試していることがございます。１点目は特定のイシューについてインテンシブに学ぶカリキュラム、つまりイシューに関連する授業科目を同じタームに集約させて系統立てて学ぶ、これを「モジュール」という形で授業科目を設定してカリキュラムを組み、週に２回開講する科目も用意しています。

２点目は、多様な学問領域を集約的に学ぶ、インテンシブに学ぶと同時に学際的に学んでいくことを第１タームでやろうということです。文系理系領域を横断するものを作って、それを週２回、これは組み合わせをして受ける形ですが、「クロスメジャープロジェクトⅠ」という授業を実質週２回の開講という形でやっています。

集約しているのはこの「モジュール」と「クロスメジャープロジェクトⅠ」ですが、留学、インターン、野外実習、実験等、学外での学びを個々の学生がカスタマイズできる「セルフデザインギャップターム」を２ターム、３ターム、５ターム、６タームで設定しております。

全体のイメージを表したのが図２になります。青い部分が集約ターム、ここに必修を置く。黄色い部分がセルフデザインギャップタームということで、「特別プログラム」や「自己設計科目」という取り組みをしています。また、学生が実習や留学などに活用しやすくするという形で、３年次のカリキュラムの中で組んでいます。１、２、３、４年次が全部一緒ではなく、３年次という形でやっています。

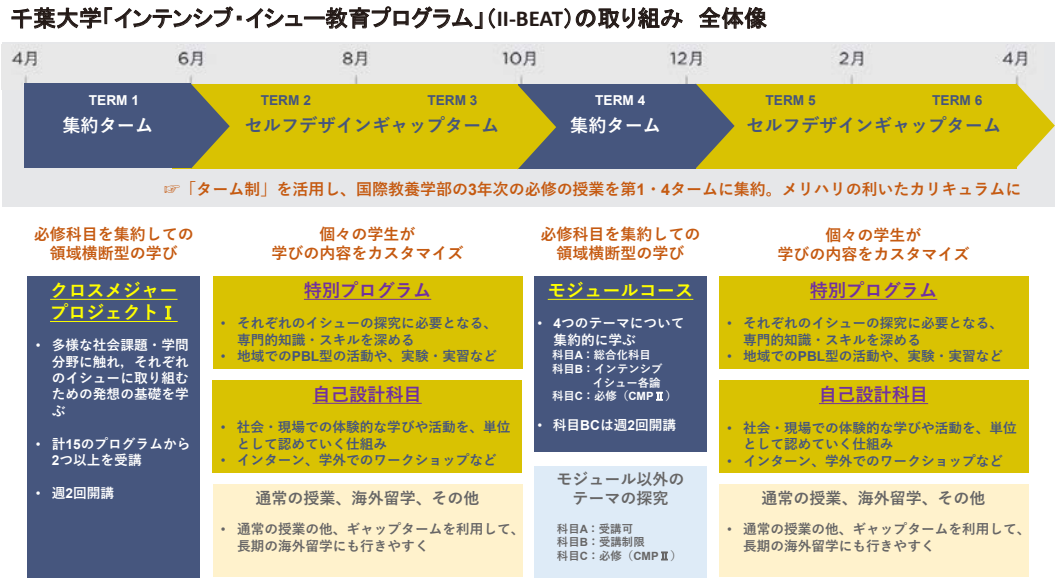

図２ 「インテンシブ・イシュー教育プログラム」（II-BEAT）の取り組み全体像

２つ目ですけれども、国際教養学部でこの課題に取り組んでいるというのは、まず新しい学部であるということと、それから文理混合の学部であることが理由です。講座制ではなく、３年次から、グローバルスタディーズ、現代日本学、総合科学というメジャーに所属します。これは横断をして授業を受けることができるということで、文系的な課題を持っている学生が理系的な科目を取るということ、またその逆もやるというようなこと。ディシプリンから出発するのではなく、イシューから入るので広くやっていこうと。そのためのカリキュラムの組み方、今回は３年次に実践しており、そして学生は４年次でメジャープロジェクトに取り組みます。これはいわゆる卒業論文になりますが、作品を作る、あるいはイベントを実施するというようなことも含めて、広くアウトプットを設定してよいとしております。このように、国際教養学部では少し実験的なことを試すというところがございます。現在、千葉大学では全員留学になっておりますが、2016年度にこの学部ができたときに、AC期間の４年間、全員留学をカリキュラム的に作っていくという形で実施しました。いわゆるモデルケースを展開していこうという形で、このII-BEATの場合も効果的なターム制導入を全学的に水平展開できる可能性を探るチャレンジしているとお考えください。

II-BEATの実施状況

続いて、実施状況についてです。まず、集約タームの「クロスメジャープロジェクトⅠ」についてですが、元々学部ができたときは１、２ターム連続で履修して２単位、実質的にはセメスター制でした。これを15に細かくし、図３のようにグローバルスタディーズ、現代日本学、総合科学それぞれのメジャーに５つの授業科目を設定しました。、ここから２つ取る、いわゆる週２回開講で１タームで基本的に全部履修する形で、学際的な学びをしていけるよう設定しています。

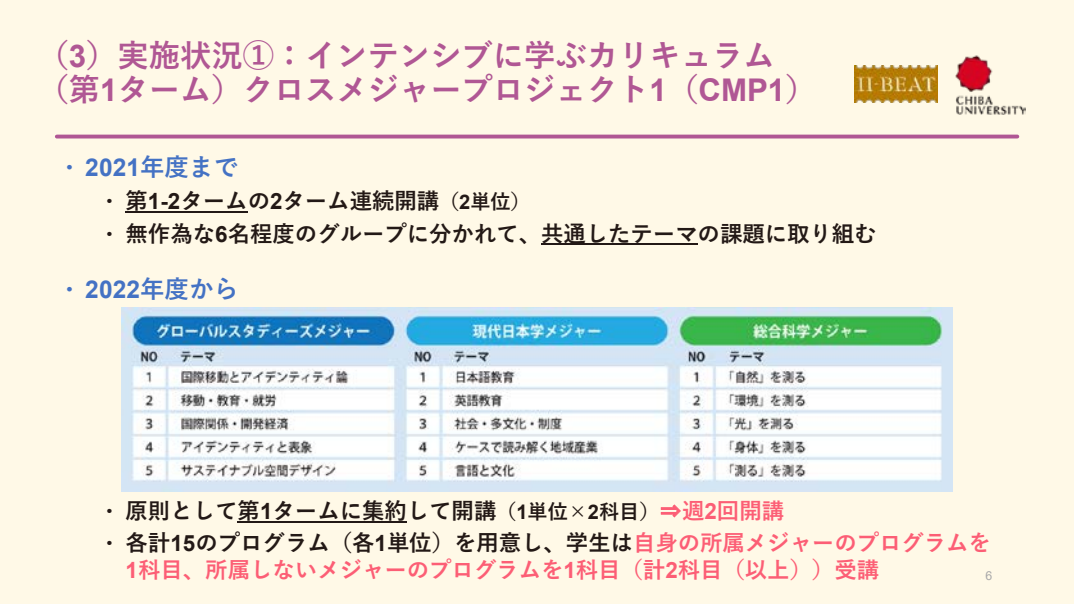

図３　クロスメジャープロジェクトⅠについて

次に、これも集約タームですが、第４タームに「モジュールコース」というものを当初は３つ設定しました。そこでは、３つの関連領域を設定し、科目ABCの組み合わせ、科目Ａは総合的な科目、科目Ｂは週２回開講の、ある程度特論的な科目、それから演習も週２回にして科目Ｃという形で、科目群を新設しました。

当初は３つのモジュールコース、「移民・難民論研究」「地方・地域振興研究」「総合環境科学研究」で科目を図４のようにABCで設定しています。これは今までのあった科目をある程度合体させるなどして、集約的に第４タームでやろうということでございます。

（3）実施状況②：インテンシブに学ぶカリキュラム（第4ターム）　モジュールコース

II-BEAT　CHIBA UNIVERSITY

■2022年度開講　実績

テーマ	移民・難民論研究	地方・地域振興研究	総合環境科学研究
科目A 総合化科目	移民論	地方創生論	科学と社会的意思決定
科目B インテンシブ科目	フィールドから学ぶ	千葉の地域資源と活用	社会と科学技術の界面
科目C 演習＝CMP II	移民・難民特別演習	地方・地域振興特別演習	総合環境科学特別演習
コース受講者数	9名	13名	12名

→2023年度は、新たなコース「スポーツ振興研究」を開設

8

図４　モジュールコースについて

こういったモジュールコース（図５）を増やしていくのが当初のII-BEATの目標としてございまして、最初は３つからスタートしておりますけれど、2023年度の今は４つになっております。後々モジュールコースを増やしていく、授業科目をもう少し集約的にやっていくことで、おおよそ国際教養学部基準での70％がモジュールの第２タームの集約的な学びをする形にできるかどうかを試していると。そして、その内容を他学部の教育プログラムとも連携できないか探り、モデル展開していこうというのが当初の狙いです。

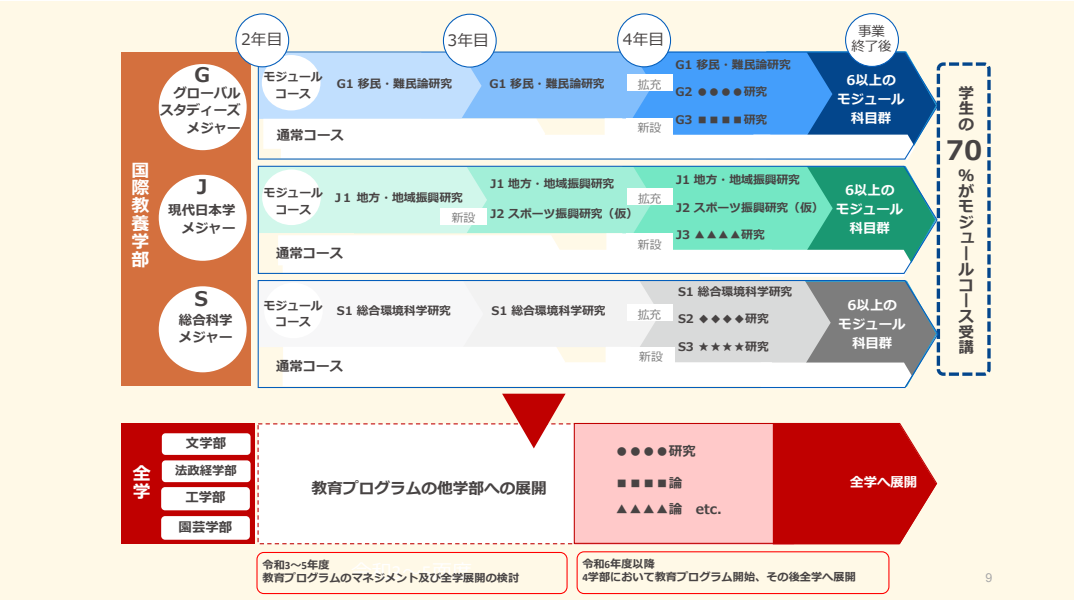

図５　モジュールコースのロードマップ

図６では、セルフデザインギャップターム、黄色い箇所を説明してまいります。ここは必修科目を置かず、留学、インターン、それから野外実習など、個々の学生がカスタマイズしやすいように設定しています。もちろん授業科目もありますが、これを取らないと卒業できないという必修科目は置いてはおりません。

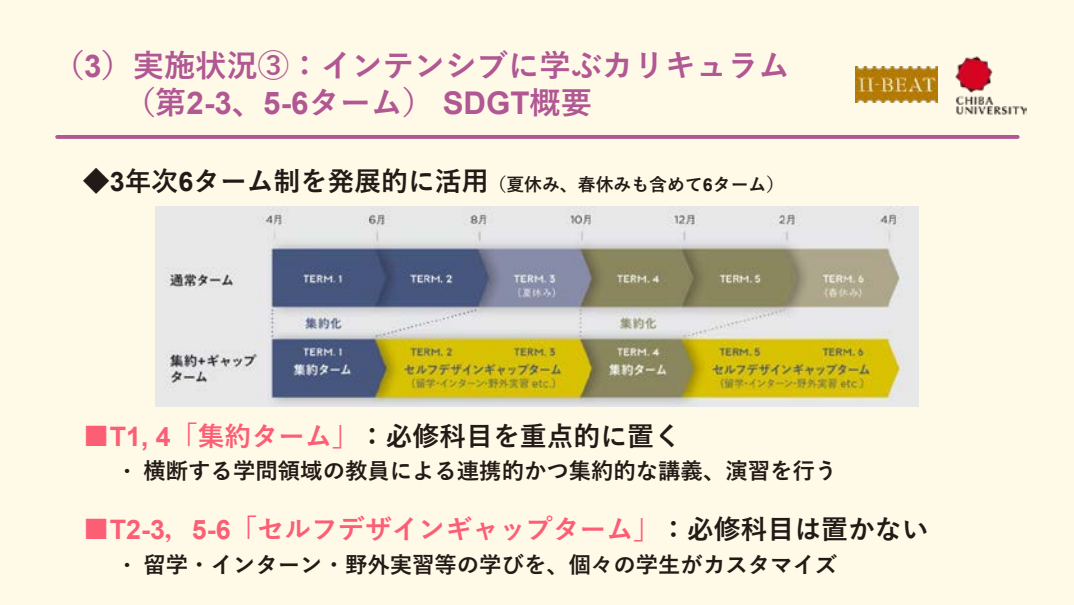

図６　セルフデザインギャップターム

ある意味では集約タームの第１、第４ターム、そして自由のあるタームである第２-３、５-６ターム というような形で、集約、自由、集約、自由というリズムでやっていくことを３年生で経験するというターム制の使い方をしております。

このセルフデザインギャップタームで一つ挑戦していることに、「自己設計科目」というものがございます。学生自身が参加する学外のインターンや取り組みについて、自分でシラバスを作る。計画書を提出し、計45時間以上活動に参加し、それからアウトプットをする。ルーブリックによる評価で、学務委員長とこの授業を担当した教員で採点する形をとっています。自分で作って、自分でやって、自分でアウトプットする。学生のアウトプットに関しては、学内限定サイトで後輩たちが見られるようにしております。学外には公開はしてございません。

もう一つ、セルフデザインギャップタームでやっているものに「特別プログラム」というのがあります。図７、８は2022年度のものですが、年度の最初に履修登録をするものではなく、それぞれの指導教員が、必要とする専門のプログラムを設定し、カスタマイズしたものを学生が取るというような形で実施しています。

（3）実施状況③：インテンシブに学ぶカリキュラム（第2-3、5-6ターム） SDGT「特別プログラム」

II-BEAT　CHIBA UNIVERSITY

2022年度　T2-3 特別プログラム一覧

プログラム名	担当者	単位数	受講者数
環境・生物多様性プログラム	上原　浩一・永瀬　彩子	1	7名
身体活動量と睡眠データの分析	小泉　佳右	0.5	4名
唾液中コルチゾール分析	小泉　佳右	0.5	5名
植物細胞の単離と培養	渡辺　正巳	0.5	2名
植物の機能性成分の分析	渡辺　正巳	0.5	1名
照明がもたらす感情効果	田中　緑	1	2名
光科学基礎実験	三野　弘文	1	4名
墨田区のものづくり企業とSDGsまちづくりのブックレットデザイン	田島　翔太	2	8名
「脱炭素・未来ワークショップ」ファシリテーター	鈴木　雅之・倉阪　秀史	1	9名
横芝光町タウンプロモーション動画制作（夏バージョン）	鈴木　雅之	2	5名
コミュニケーションで創る「再生医療の未来」	東島　仁	1	2名

13

図７　2022年度　第２-３タームにおける特別プログラム一覧

（3）実施状況③：インテンシブに学ぶカリキュラム（第2-3、5-6ターム） SDGT「特別プログラム」

II-BEAT　CHIBA UNIVERSITY

2022年度　T5-6 特別プログラム一覧

プログラム名	担当者	単位数	受講者数
無酸素性作業閾値測定	小泉　佳右	0.5	4名
環境・生物多様性プログラム2	上原　浩一・永瀬　彩子	1	3名
仮想空間内におけるデジタル教材・マニュアルづくり	小泉　佳右	0.5	4名
可搬型移動建築の地域活用	田島　翔太	2	2名
松戸SDGsまちづくり	田島　翔太	1	4名
仮想現実を用いた地域活性化（長柄町編）	田島　翔太	2	3名
フィールドワーク準備演習	和田　健	1	4名
グローバル社会における日本語コミュニケーション	佐藤　尚子・吉野　文	1	5名

14

図８　2022年度　第５-６タームにおける特別プログラム一覧

これを第２-３ターム、第５-６タームでやっております。これは文理混合の学部で、いわゆる積み上げ式でやっていくことではなく、広く学ぶカリキュラムの、ある意味では弱点を補おうというところがあります。例えば、無酸素性作業閾値測定という、いわゆるスポーツ科学的なものをやる場合、体系的に学ぶこともできますが、実際に実験をやるとなると、やはりカスタマイズしてやっていくことが重要になっていきます。そういったものをそれぞれの先生が設定をして学生が受講するという形で、最終的には認定科目として単位を出してございます。セルフデザインキャップタームの中で教員と学生で相談をしてプログラムを作り、そしてそれで実践して、単位認定するという形をしております。

II-BEATの今後の課題

以上のような流れで、2022年度にこのカリキュラムを受けていた学生が卒業論文を一昨日（2024年１月15日）提出いたしました。その上でどのような効果があったかを見ていくというのが今後の課題の一つ目です。私たち国際教養学部の方でやらなくてはいけないことで、これから卒業するであろう４年生が試したこのII-BEATの集約ターム、セルフデザインギャップタームの効果を見ていこうというところがございます。

そして二つ目に、全学的な水平展開をする中で、週２回開講の可能性と困難さが挙げられます。千葉大学はターム制をとっておりますが、実質的にはセメスターベースの授業科目があるというところは、偽らざるところです。そういう意味では他部局の専門科目、教養科目、それから国際教養学部の完全ターム制の科目と、いろいろな形が存在しているところの難しさというのもございます。

それから、ギャップタームのあり方で、元々クォーター制、ターム制にする意味はやはりギャップタームと大きく関わってきます。小澤理事からもありましたように、教員の側のいわゆる疑似サバティカルということも今後の課題ですが、学生が自在に学べるようなあり方をどう考えていけるか。これは、全学全ての部局に当てはまるとは限らず、使えるところは何かを考えていくのが、この事業の中で求められているところです。来年度が最終年度ですが、それに向けて考えているというのが現在の状況でございます。

そういった意味でギャップターム、それからクォーター制、ターム制での活動をどう考えるかという現在の進捗をご報告させていただきました。私の方からは以上です。ありがとうございました。

神戸大学における２学期クォーター制：導入のねらいとその成果や課題

近田　政博 氏
（神戸大学大学教育推進機構　大学教育研究センター　教授／教養教育院副院長）

神戸大学ではクォーター制を「２学期クォーター制」と呼んでおります。４学期制ですが、従来のセメスター制を２つに割って、学期制度そのものは残したままでクォーター化を導入いたしました。

結論から申し上げますと、それは必ずしもうまくいかず、各学部では再びセメスター科目に戻しつつあるという現状がございます。そういった元々の導入の狙い、それからどんな効果や課題があったのかについてご紹介したいと思います。

私自身の立ち位置ですが、私は教育本部に相当します大学教育推進機構の教授をしております。教養教育委員の副院長を仰せつかっておりますが、この２学期クォーター制の導入の当時は大学全体の評価FD委員長をしておりました。

したがいまして、導入するときは、導入する側の立場の教育担当理事、共通教育担当副学長を補佐する側にいたと言えるかと思います。私は2014年度に神戸大学に赴任をいたしましたので、そのときはもうクォーター制が導入されることが決まっておりまして、あと技術的な問題をどう解決していくかをちょうど調整していたときでした。2016年度から実際に導入されたということでございます。

神戸大学における「２学期クォーター制」のねらいと制度設計

狙いですが、先ほど小澤先生から千葉大学のこのターム制のお話がありました。ほぼ同じでございます。学生の海外留学を促進したい、それから集中的な学習を実現したいということでございました。まさしく文科省による学事暦の多様化の問題、ここに関係しておりまして、ギャップタームも活用して、学生の、特に短期の海外留学と、それから集中的な学習を実現したいということでございました。

2016年度から実行したこの仕組みは、授業料は前期後期ごとに徴収する仕組みはそのままにしました。それから、履修登録も前期後期ごとに登録をして、クォーターごとではなく、前期に第１クォーターと第２クォーターの履修登録をし、後期の頭に第３クォーターと第４クォーターの履修登録をするということで、学期制はそのまま残しております。

それから、成績が学業成績証明書に反映されるのも各学期末ということで、学期制の仕組みを残しながら、授業としてはそれぞれ学期を２つに分割するという仕組みをとりました。週１回90分の開講で、８週間で１単位という基本的な仕組みで同意をいたしました。

いろいろなパターンがありましたが、全ての科目をクォーター化した部局が全学共通授業科目と、文学部、理学部、工学部、農学部、国際人間学部、海事科学部でした。セメスター科目とパラレルにやる仕組みをとった学部もあり、法、経済、経営はこういったやり方でした。

それから、初年次科目だけクォーター化したのが保健学科。基本的には導入しないという方針をとったのが医学科ということで、学部によって導入の濃淡はいろいろと違いがありました。ただ新入生が一律に学ぶ全学共通事業科目は、全ての科目をクォーター化するという方針で進めました。これは今でも変わっておりません。

週１回やるタイプと、それから週２回開講するタイプの授業と、いろいろなタイプの授業がございました。特にご関心があろうかと思いますが、週２回開講の授業では８週で２単位を出す方式で、法学部、経済学部、経営学部、理学部、工学部、農学部等で導入をいたしました。

２コマ連続開講の学部もいくつかございました。いろいろな形態の授業があったんですけれども、導入当初は実際にこういった授業のやり方をとりました。その際に、どこの大学を参考にしたかというのがこの表１でございます。

表１　クォーター制を導入した他大学の例

	広島大	岡山大	早稲田大
導入年度	H27年度　試行 H28年度　本格導入	H28年度	H24年度
導入目的	・集中的な受講による教育効果の向上 ・自主的な学修体験の促進	・単位の実質化 ・教育効果の向上	・海外での学修体験促進 ・「共同学位プログラム」促進 ・学生の授業集中度の向上
実施方法	90分×2コマ連続×8週＝2単位	60分×30回（8週）＝2単位	90分×週1回×8週＝1単位
適用範囲	全学規模、セメスター科目も並存	学士課程全体	全学規模、セメスター科目も並存
特色	・同一科目を2コマ連続で開講 ・学内呼称は「ターム制」	・60分授業制度の導入 ・授業時間は従来の1.3倍増	・補講はLMSにより代替可 ・導入は学部・学科、および担当教員が個別に判断

当時、導入する際にいろいろと他大学の状況を調べたんですが、広島大学、岡山大学、早稲田大学には実際に神戸大学までお越しいただいていろいろな導入上の課題等を伺うことができました。広島大学からは特にこの２コマ連続開講という点について非常に示唆を得ることができました。岡山大学からは60分授業、従来の90分ではなくて60分授業を導入して仕組みを変えたというお話が印象的でした。それから早稲田大学の仕組みについてもご紹介をいただきました。

導入の背景と各方面からの反応

学生からの反応ですが、当初、学生からは反発されました。学生新聞からはコテンパンに言われまして、良くないという意見がかなり多数を占めました。制度がややこしい、試験が増えるという意見がた

くさんあったんですが、学生と教職員の懇談会という行事等で聞いてみたら、そうでもなくて肯定的な意見もありました（図９）。むしろ集中できる、落としても１単位だけで済むなど、いろいろな肯定的な期待値といいますか、期待する意見もありましたが、もちろん消極的な意見もありました。

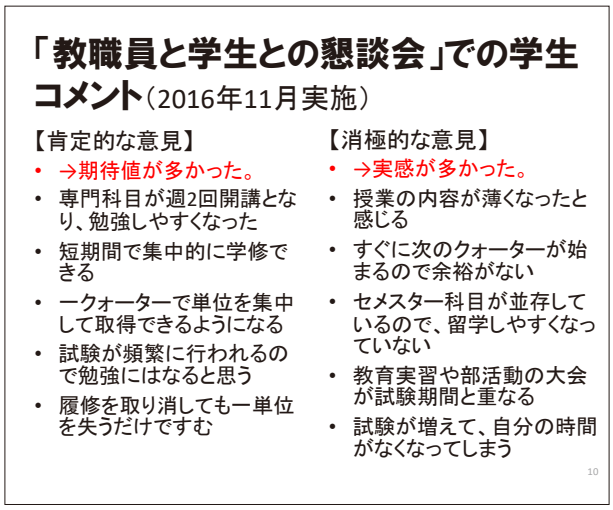

図９　「教職員と学生との懇談会」での学生コメント

ただ全体として言えたことは、学生は慣れたということです。２、３年経つと学生は入れ替わりますので、何年かすれば学生はそれが当たり前だと思って、慣れていったようです。それに比べて根強く、やはりなかなかうまく浸透しなかったのが教職員の方でした。

各研究科長からは図10のような意見が出されております。これは肯定的な意見ですが、留学に行きやすくなった、集中的に教えることによって学習効果を期待できるなど、期待する気持ちも当然あったわけですが、具体的な課題としては図11～13のような意見が寄せられました。

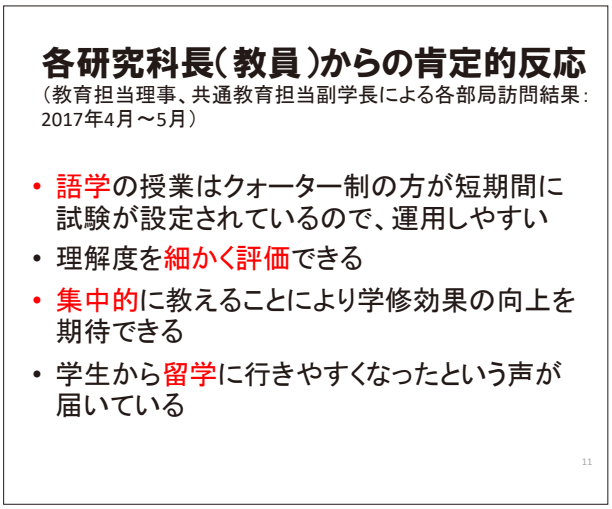

図10　各研究科長（教員）からの肯定的反応

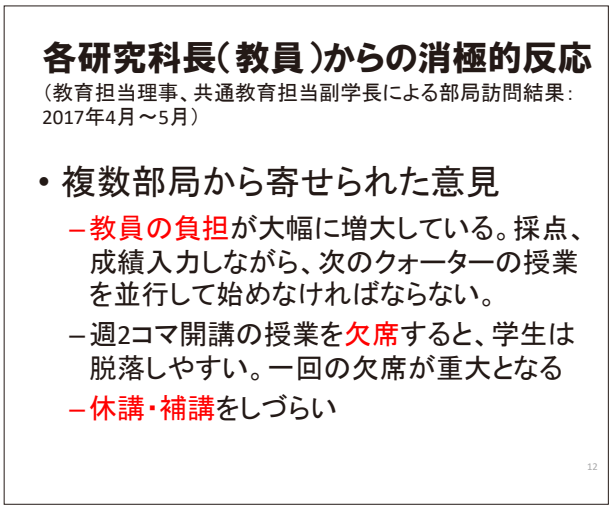

図11　各研究科長（教員）からの消極的反応：複数部局から

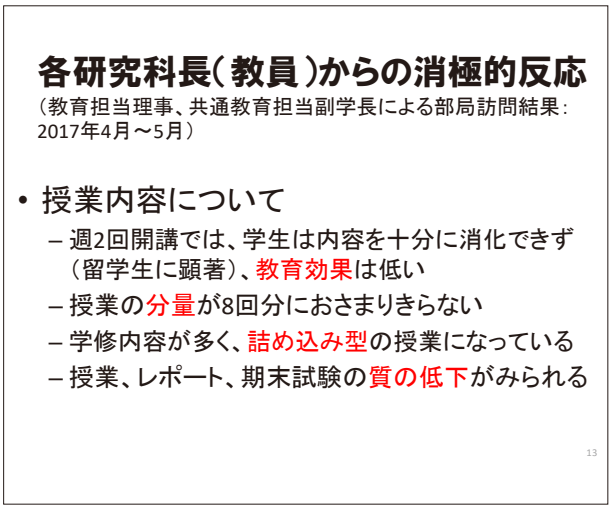

図12　各研究科長（教員）からの消極的反応：授業内容

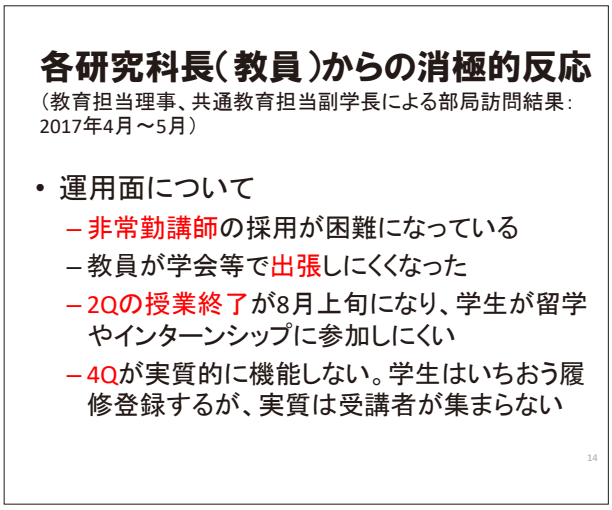

図13　各研究科長（教員）からの消極的反応：運用面

教員の負担が増大したということです。採点や成績入力をしながら、次の週からはもう次のクォーターの授業が始まってしまうので、ものすごくせわしくなるということです。それから休講、補講をしづらくなって、休まなければいけないときに、補講をするだけの予備日が確保できないという問題がありました。

それから授業の内容についてはセメスターの授業内容に慣れていたので、なかなか８回分に収めるのが難しいという意見がありました。これは慣れもありましたが、詰め込み型になりやすいということは教員から言われていました。

それから運用面ですが、非常勤講師の採用が困難になってしまうと言われました。つまり、他大学はまだセメスター制が主流でしたので、クォーター制にしたときに、非常勤講師を確保できるのかという問題。それから２クォーターの授業の終了がどうしても８回＋８回で16週にわたると、２クォーターが終わるのが８月の上旬のお盆の前の週ぐらいになってしまうんですね。そうすると学生がインターンシップとか留学に参加しにくくなってしまい、かえって逆効果ではないかという指摘もありました。

それから４クォーターでは、学生は一応履修登録をするけれども、もはや保険をかけて履修登録をしておくので、第３クォーターで合格してしまえば、合格したかどうかというのはなかなか発表はすぐ出ないんですけども、手応えがあれば第４クォーターに来なくなってしまう可能性があって、第４クォーターの出席率が下がるという意見がありました。

私自身の実感ですが、一教員としては、やはり成績評定の作業がかなり増えたというのがあります。それから、補講の実施が難しくなったということがあります。補講は実際５限目以降にやる仕組みになっているんですけれども、学生がなかなか集まらないので、どうしても学生の不利益が生じてしまうことがあります。しかし人間、私も10日ほど前に風邪をひきまして、１回だけ授業を休んだんですが、そういうときの補講が大変難しいという事情がございます。それから、第４クォーターの出席率が下がるという問題がございます。

あとは、教務の担当職員が大変反対をしました。なぜかというと、教室を確保する余裕がない。これには、神戸大学の教室の数が足りないという事情がありました。それから時間割の作成設定や、定期試

験の関係業務が増えてしまうという指摘をされました。

問題は成果です。結果的に、成果が出たかということで言いますと、成果が出たとも言えるし、出ていないとも言えるというところです。留学をする、海外派遣の学生の数は増えております。増えているんですが、これがクォーター化の影響と言えるかどうかはわからないところです。いろいろな学内のプログラムがあり、こういったAP（Acceleration Program for University Education Rebuilding、大学教育再生加速プログラムのこと）によるグローバルチャレンジプログラムや、こういったプログラムがいくつか走っており、これらの影響も当然大きいので、クォーター化の影響が直接留学派遣数の増加をもたらしたかどうかまでは言えません。

それから、いわゆる学習時間が増えたかどうかで言いますと、若干増えましたが、図書館の利用回数等はほぼ横ばいで、本の貸し出し冊数なども調べたんですが、あまり変化がなく、むしろ減っているぐらいでした。学習の集中度が高まったかということも必ずしもはっきり言えないというところでございます。

ここからわかったことは、どちらかというと消極的な意見の方が多かったということです。千葉大学の皆さんには大変申し訳ないんですけども、神戸大学はかなり時間と労力をかけて制度を導入してみたにもかかわらず、新制度のメリットを実感するまでにはちょっと時間がかかってしまい、それまでの間にデメリットに教職員が非常に敏感に反応してしまったという経緯がございます。

制度が定着して構成員がメリットを実感できるようになるにはやはり一定の時間がかかるなと感じております。その間にデメリットが強く感じられるとなかなか制度を維持していくのが難しいということを、やってみて実感をいたしました。

いろいろ軌道修正を図ろうとしました。このセメスター的な運用を検討しようとしたり、これはちょっと細かいので説明をちょっと省略いたしますけれども、やろうとしたりしたんですが、なかなか合意形成が得られず、時間がかかった割には導入できませんでした。

それから、授業時間を90分から105分に延長するという案も、平成29年度から平成31年度にかけて延々と議論したんですけども、これも反対意見が多く、授業の終了時間がどんどん押してしまう、学生の集中力がもたないなど、いろいろな問題点が指摘され、105分化は導入できませんでした。したがって、軌道修正がなかなか思うようにいかなかったということがあります。

唯一改良した点は、成績発表と単位授与はクォーターごとではなくて学期末ごとにやるように変えた点です。最初は成績の発表をクォーターごとにやっていたんですが、これだと教員の採点作業が追いつかないとわかりました。運用するのがなかなか難しいということから、奇数クォーターの成績発表は偶数クォーターの発表のときに一緒に行う仕組みに変えました。これによって、教員は採点する時間に少し余裕が確保できたんですが、学生にとっては奇数クォーターの成績が次の偶数クォーターが終わるまではっきりせず、偶数クォーターを履修すべきなのかはっきりしないという課題がどうしても生じてしまい、学生からは不満が出ました。ただこれは、採点するために一定の時間が必要だという論理で変更いたしました。

「２学期クォーター制」の現状

現状としては、工学部の一部の学科を除き、全ての学部研究科はセメスター制に戻しました。ただし、今でも全学共通授業科目は全てクォーター制を維持しています。これは変更する予定は今のところはございません。ある程度クォーター制で定着してきたところです。私自身も年間６クラス分、このクォーター制の授業を担当しておりますけれども、大分慣れてまいりました。

したがって、多くの教員や学生はセメスターの科目とクォーターの科目が両方併存している状態にあるということでございます。これに慣れることがやはり今は求められていて、だんだん学内的には学生も教員もセメスター科目なのかクォーター科目なのかを常に意識しながら両方担当する、両方履修することに慣れてきております。

全体としては、２学期クォーター制の導入から得られた教訓としては、ここが結論になりますが、学事暦の変更はわずかな変更にも全学的な合意形成に多大な時間と労力が必要になることを痛感いたしました。

それから授業担当教員や教務担当の職員の方、それから学生の目線に立って運用上のコストやリスクを慎重に検討し、それを上回るメリットをできるだけ早く体験できないと潰されてしまう可能性があるため、どういうコストとリスクがあるかを確認し、その一つひとつがスムーズにいくように準備していく必要があると痛感いたしました。

不確定要素や反対意見が根強い状態だとなかなか制度を安定的に運用していくことが本当に難しいということを、苦い経験ではありましたけれども、学ぶことができました。ただクォーター制そのものの教育的な意義については、これはもとより大事なことだと思っております。大事なこととして、運用するときに労力やコストが大きいと潰されてしまうため、そこをうまくやる必要があると学習いたしました。以上で私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

南山大学のクォーター制：週２回開講授業の導入と運用、及びその教育効果

岡田　悦典 氏
（南山大学　副学長（学務担当）／法学部　教授）

南山大学で学務担当副学長をしております、岡田悦典と申します。所属は法学部でして、専門は法学なものですから、教育学的な専攻をしているというわけではないので、あくまでも南山大学の実践をご紹介させていただくという形でお許しいただければと思います。

南山大学は私立大学、しかもカトリック系の大学でありまして、総合大学としては、もう一つ上智大学がありますけども、そのような総合的な私立大学でございます。現在学士課程には、人文学部、外国語学部、経済学部、経営学部、工学部、総合政策学部、理工学部、国際教養学部という、８学部があり、大学院は６つあります。在籍者としては学部生が全学で大体１万人弱。そして大学院生が博士前期・修士課程に146人、博士後期に30人います。これは2023年５月１日現在のものであります。そのため、１万人規模の私立大学でクォーター制を実施していることになります。

簡単に申し上げますと、学年暦を全学で統一的にやっておりまして、今年の例ですが、第１クォーター、第２クォーターは、図14のように分けております。クォーターという言葉を使って分けており、今年で言えば、第１クォーターが４月５日から５月27日の２ヶ月間、そして定期試験期間を１週間置き、第２クォーターを６月、７月末に定期試験をする。８月と９月の半分は夏季休暇という形になり、第３クォーターは９月から11月の半ばまでの２ヶ月間。そして定期試験期間を置き、第４クォーターは若干の冬休み期間を挟みますけども、11月の後半から１月の前半にかけて。そして、１月の後半に定期試験期間を１週間置いているという構成になります。

図14　南山大学における2023年度の学年歴

私立大学ですから、どうしても２月は入試の期間で非常に忙しくなるので、クォーター制を導入するときに当然４月から翌年の１月までという、この期間内の中でどのように設定するのかが、議論されたということです。

具体的な内容としましては、まずその授業の組み方ルールを導入するときに図15のようなルールを全学で設定しまして、それを随時、各学部・学科で設定したということです。すなわち、月曜日と木曜日、ないし火曜日と金曜日、この対の曜日の同時限に授業をする。例えば１限だったら月１・木１という、あるいは火曜日だったら火２・金２という形での組み合わせをする。あるいは縦と横に分けて、例えば月曜日の１、２限、ないしは月曜日の３、４限という形での連続２回にする。各学部・学科、ないしは共通教育も含めて、このような時間割設定をしてもらいたいという全学的なルールを定めました。当時は15回だったのですが、現在は一つのクォーターについて14回の授業で、１回100分という授業形態で運用しているということになります。

授業の組み方ルール

- 月・木（あるいは火・金）の同時限（すなわち1～4限）の2回 or 1・2限ないし3・4限の連続2回
- 合計14回の授業（1回100分）
- ただし、水曜日1・2限は、連続2回を設定する。 *（水曜午後は授業コマとしていない。）*
- できる限り、月・木ないし火・金の2回設定とする。
- ただし、週2回か、連続にするかは、ある程度柔軟に。
- 非常勤の場合には、連続として依頼する場合が多い。
- 週2回の授業は2単位となり、週1回の授業（例えばゼミなど）は7回で1単位となる。

図15　授業の組み方ルール一覧

ただ水曜日の１、２限については、縦コマ連続２回を設定するという形です。水曜日の午後はいろいろ会議もありますし、学生も課外活動等々があるので、この水曜日の午後は授業コマとしては設定しない。

当初は、できる限り月・木ないしは火・金の２回設定にしてほしいというのが、一応の基本原則であるけども、場合によっては横ではなくて縦の設定でやると。ある程度これらのルールを設定して時間割を設定してもらったということです。

そういう意味では、ある程度柔軟性を保ちながら、ということになります。しかし、非常勤講師をお願いするときは、当然のことながら週２回も来ることは難しい人もいらっしゃるので、非常勤の先生のご都合にもよりますが、連続して依頼する、つまり縦コマで依頼する場合が多いと一応実感として持っております。

当然、その共通教育の英語などについてはこのような自由な設定はなく、基本的に横という形で設定をしている。週に１回の授業が合計一つのクォーターでの２単位となり、例えば週１回の授業、ゼミな

どは14回だと７回になって１単位という単位設定をしている、ということになります。

例えば法学部的な形の授業設定のイメージを一応簡単に作ってみました（図16）。刑法が月１・木１で、英語が月２・木２という形になって、水曜日は縦コマ、木曜日の午後も縦コマの共通教育科目。南山大学はカトリックの大学で、「人間の尊厳のために」というモットーを持つ教育理念のもとでやっておりますので、こういう「人間の尊厳科目」というのもあり、縦コマで入れたりする。縦になったり横になったりして、このあたりは学生が組み合わせをして履修をすることにしております。

５限は、基本的には教職課程の科目などを設定することにして、共通教育や学部・学科の科目は入れない。したがって授業は基本的に１から４限、月～金の間で時間割設定をし、これを全学部共通の場で統一して、導入したと。その後大学院についても、現在は人間文化研究科、法務研究科、ロースクールはやや特殊なものですから、法務研究科や法学研究科はセメスター制を採用していますが、セメスター制を採用しても図14のように、第１クォーター後の定期試験期間中には授業等はしないという運用をしております。

クォーター制導入当時のポリシー

南山大学のクォーター制は、2017年の４月から導入しましたが、その当時、大学の執行部の考え方はどうだったのかをつい最近聞きました。私も法学部の学科長として、ちょうどこのクォーター制の導入のときに、時間割等をいろいろ調整して実現したという経緯がありますが、やはり先ほどのお話にあったように、この当時、クォーター制は非常に全国的にある種の流れがあったと。その中で南山大学は、このクォーター制を導入しようというその当時の広大な方針があって、2017年に導入をしたんですが、あの当時はクォーター制の導入を私立大学としての広報に使っていたという経緯も記憶にあります。

当然、先ほどの話と重なるんですが、基本は学生の柔軟な単位履修を推進する。南山大学は、やはりその国際性、特に留学を推奨する、あるいは海外からの留学生を受け入れることを大学の一つのポリシーとして持ち、それが特徴としてあると自負しております。そのため、こういった特徴をより強化する意味でも、この第２クォーターに海外研修を推進していこうという事柄があったということですね。

そして、柔軟な単位履修を推進する意味で、例えば、第２クォーターから夏休みにかけて海外留学に行きたいという学生をサポートするために、第１クォーター、それから第３クォーター、第４クォーターに単位の履修を寄せて、第２クォーターはぽっかり空けて海外留学等々に使うような形での事柄を模索をしていました。元々、南山大学は年間のキャップ制を導入していました。クォーターごとにキャップを設ける、学期ごとにキャップを設けるという、このあたりを各学部・学科に打診をし、各学部がそこで特色あるキャップ制を導入する。結果として、一つのクォーターに集中して履修をすることにして、別のクォーターを比較的緩やかに履修する。特に第２クォーターを空けるような選択肢を用意しようじゃないか、というのが基本的な考え方でした。

第２クォーターは、海外に目を向けると、６月、７月はやはり非常に海外に行きやすい。特にアメリカなどはそうなので、ここに推進しようということで、第２クォーターには必修を置かないことを、まず一つの全体のルールとして置きました。年次によって少し違いがあるんですけども、２、３年次の間

に、学部によっては海外研修のプログラムで単位化することをここで設置したりしました。先ほどもお話にありましたように、その当時は、教員もその第２クォーターを、場合によっては研究集中期間としてうまくそこに充てることもできるという考え方として進めたことになります。

100分授業の導入

ただ、クォーター制導入の前後でいろいろな意見があるわけです。もちろん、現在でも何らかの意見はもちろんあるんですが、基本的に学生にはこの2017年４月から導入しており、今の学生はこのクォーターを当然の前提として履修をしているので、もはや当たり前になっているというのが私の個人的な実感です。いろいろ意見があったところではありますけれども、基本的にはセメスターをさらに分割した、そういう形になるものですから、当初の考え方が十分実践されているかというと難しいところがあるんですが、一応は四つのこのクォーターに基づいて授業を実践しているという意味では、教員側も普通の感覚でやっているというのが現状かなと個人的には思っております。

全学的に一斉導入したんですが、ただ当初は15回90分授業ということで、週８回、７回と半分というんですかね、そういうことをやっていたんですね。そうすると、やはり学年暦にかなりの負担がかかると。私立大学なものですから、２月に授業をやることは想定できず、夏休みもしっかり取りたいという話になると、学年暦にかなり無理があるんですね。結果、ゴールデンウィークあたりを授業日に設定したりするものですから、導入して２、３年頃に、今時の大学として、「ゴールデンウィークも頑張って勉強する休みのない大学」という新聞記事で「休みがない大学全国第１位」として、南山大学がボーンと出てしまったことがございました。ゴールデンウィークに１回か２回しか休みがなかったということですね。こういうのはさすがになかなか、それ以外にもいろいろ行事があるものですから、学生もある程度余裕のある学年でいる方が、教職員にとってもハッピーではないかということで、100分授業として14回に変更しました。ただ、改組関係があり、理工学部は15回をそのまま実施をしていたんですが、急には変更できないということで、2021年に100分授業として、それが今日にまで至っているということになります。

クォーター制に伴う諸対応

南山大学の場合には、カリキュラムだけではなく、それ以外も重要なクォーター対応をやっております。その一つが休学、退学をクォーターごとにやっている点です。簡単に言うと、１年間を四つに区分しているんですね。第２クォーターで退学する場合は、９月の半ばぐらいに退学するという形になると。それから、奨学金の成績資格の判定は、クォーターごとにやっていないと確認をしております。

また、履修中止や登録変更はクォーターごと、定期試験もクォーターごとにやっている。ただ、クォーターではなかなか難しいということで、当初から成績報告評価は学期ごと。南山大学の場合は春学期、秋学期と呼んでおりまして、ここで成績報告と発表は春学期の場合には８月中に行って９月、秋学期については２月に行って３月に発表しています。

通常は３月卒業ですが、９月卒業もあります。履修登録は学期ごとにやっており、成績疑問調査制度、これも成績発表をしないと疑問調査ができないので、これも学期ごとにやる。学費の増減も学期ごとにやる。ただ、休学・退学すると、当然その部分は戻す、半分戻すという形の対応をしております。

例えば、履修登録。今年の例として秋学期でいうと（図16）、９月５日に履修希望登録をやり、登録確認を９月12日にして、９月12日から登録変更が可能という設定。授業を開始した後に、第３クォーターの登録変更がすぐその後に１週間程度あると。第４クォーターの登録変更は、第４クォーターが始まったとき１週間で対応をしているということになります。そのため、履修登録は第３クォーター、第４クォーターまとめてやることになります。

図16　履修登録（2023年度秋学期の場合）

また、履修中止の制度というのがございまして、これはクォーターごとにやっております。今年の例でいうと、クォーターごとに履修の中止、GPA がやはり関係するのでこういった履修中止制度をそれぞれのクォーターごとにやっていることになります。

次に、各学部の今年度のキャップについてです（図17）。例えば、人文学部でいうと学期ごとに24単位の履修キャップを設けております。外国学部に対しては学期ごとに28単位、年間44単位というキャップを敷いている。このように人文から経済学部では、学期と年間を組み合わせたような、あるいは学期ごとのキャップを敷いているんですが、例えば法学の場合では、クォーターで14単位、学期で24単位、年間で42単位という形でのキャップを敷いています。こういう形でクォーターを利用しながら学期と組み合わせ、年間でこのキャップを導入しているということになります。

2023年度の学期・クォーターのキャップ

	第1Q	第2Q	第3Q	第4Q
	春学期		*秋学期*	
人文学部	各学期24単位			
外国語学部	各学期28単位（ただし年間44単位）			
経済学部	各学期24単位			
経営学部	各学期24単位（ただし年間24単位）			
法学部	各**クォーター**14単位 各学期24単位 （ただし年間42単位）		各**クォーター**14単位 各学期24単位 （ただし年間44単位）	
総合政策学部	各学期26単位（ただし年間48単位）			
理工学部	各**クォーター**16単位 各学期24単位 （ただし年間44単位） なお卒業研究科目を履修するクォーターについては 各クォーター12単位			
国際教養学部	各**クォーター**15単位（ただし年間44単位）			

南山大学・2023年度授業科目履修案内・履修要項〔2023年度入学者用〕18頁より引用

図17　各学部の学期・クォーターごとのキャップ（2023年度）

第２クォーターを利用する、海外研修のようなものを推進しようということで、南山大学の国際センターで全学でいろいろな形の海外研修制度を用意したり、あるいは留学生、交換留学制度のようなものを用意したりしています。そこで、クォーター制の導入とあわせて、学部でもそれぞれ単位のつくようなプログラムを導入してはどうかということで、全学で、各学部学科でそれぞれ導入したという経緯があります。

今年の例で言いますと、こちらにあるフランス学科、ドイツ学科、国際教養学部の国際教養学科などがこの第２クォーターを利用したプログラムを実施しています。コロナ禍でなかなか十分に機能しなかったということでありますけども、こういったプログラムは昨年あたりから徐々にまた復活し始めています。ただ、後ほど説明しますように、海外留学等々、もちろん増えたといえば増えたんですが、当然学生のマジョリティーは単位の履修の方に関心がある。学部のそれぞれの特性、学部の扱う学問領域の特性にもよると思いますが、学部によってはなかなか海外まで目を向けられない学生が多いという、そういう性格も当然学部によっては出てきます。

ですので、第２クォーターにこういうプログラムに参加する可能性はそんなに高くはない学部もやはりある。そうすると、通常のクォーターで、単位履修ではない、夏休み、あるいは冬、春休みも利用して（海外に）いきたいという学生も出てくるので、そこに応じたプログラムを設定することも起こり得て、各学部でそういった実践をしているところもあります。その辺りが今後の課題というか、その辺りをどうしていったらいいのかは、私達が考えるテーマの一つでもあります。

クォーター制導入の長所・短所

長所と短所についてですが、セメスターから一括してクォーターに移行したものですから、その当時はいろいろな議論がありました。教育効果という意味合いでご紹介するのは、やはりクォーターごとに

各教科集中して授業を履修できるということです。当然、定期試験あるいはレポート提出等々があるので、間延びしないということですね。そのため、４カ月間にわたるセメスターだと、４月頃にやっていたことは７月頃には忘れてしまっているということもある。そういう意味で間延びがないことは非常に大きいかなと思います。

導入当初、やはり学生はクォーター制になって、結構大変なのではないかと言っておりました。ただ、学生によっては、すぐ定期試験があるから良い、非常に勉強しやすいと。結局、通常授業がセメスターで週１回のところを、概ね週２回に変え、期間を半分にするのが基本で、ほぼそれに尽きるので、定期試験が増えることは、神戸大学さんの方は（大変な部分が）少し増えたという話ですが、南山大学の場合では、例えば、第１クォーターに学生が頑張って詰めれば当然試験は増えますけども、12単位ということだとゼミや試験が３～５つぐらいになるのが、これがセメスター制だと倍になり、７～８つぐらいになる。すると、その定期試験期間に８本勉強しなくてはいけない話になると、やはりセメスターよりもクォーターの方が定期試験対策などにも良い。もちろん、レポートのような形で単位を獲得する授業であればまた違いますけども。

また、定期試験期間中は、教員にとっては定期試験の監督などはありますが授業はしないものですから、そういう意味で一瞬のブレークにもなり、学生も比較的、学部によってはそういう学部もあるのが現状かな。やはりそういうところでの効果はあると言えるかなと思います。

あとは、理想と現実はなかなか難しいですが、細かい段階的な履修が可能になる。この辺りは実現できるかどうかはポイントですが、一つ長所として言えるかなと。

短所は、やはり教員の方の休講がしづらくなる。そういうものもあり、学生の方も一旦体調を崩すとリカバリーが結構困難になる。ただこれに対しては、とりあえず第１クォーターを置いておいて、第２クォーターで頑張ればいいという、逆に言うと敗者復活もできる。この短所と言えば短所、セメスターの方がのんびりするので、学生も１回、２回は体調を崩して難しくても、いろいろな情報に接し、それぞれ勉強、自習してリカバリーできる点はしやすくなるというところです。

また、週２回ではなく週１に適した授業、例えば演習などは、現状では１単位にぶつ切りにしてクォーターごとに計４回成績を出すという形になり、あるいは演習を週２回にするパターンもありますが、週１で適した授業形態というのがあるので、確かにセメスターから比べると、そのあたりが少し不利な点かなというところであります。

運営面では、休退学も含めてですが、学生のサービスとしての側面はやはり向上するだろうと。あるクォーターによっては教員も時間的余裕が生まれる。当然、学生へのサービスという観点からすると、やはり事務としては忙しくなったという意見はあります。南山大学は私立大学なので、教務なども一本化しています。そのため、教務からは非常に忙しいと言われるようになりました。この辺りは改善というか、強化をしていく必要性があるかなと。あとは、当然裏腹に、クォーターによっては過剰なコマ負担になっているものもあります。それは短所といえば短所であり、場合によってはあるクォーターにおいてはすごくゆとりが出るということにもなりますので、この辺りはどちらもどっちかなと思うところです。

他大学との連携の観点で本学が一番どうかと思っているところは、クォーター制を導入していない大

学が周辺には多いので、単位互換がしにくくなったというのはある種のデメリットであるということで、私としては周辺の大学もクォーターにしてもらえると非常に嬉しく思うところです。

元々この第２クォーターにおける海外留学をしやすくするという南山大学独自の課題としては、ここを積極的に今後も進めていけるかどうかということで、考え方を少し変えた方がいいというところもなくはありませんが、第２クォーターをどう充実させる、特色を持たせていくのかというのが、やはり独自の課題かなというところです。

クォーター制を導入して私が実感するところとしては、学生の立場からするとセメスターとクォーターが混在しているのは非常に大きなデメリット。クォーター制度の独自の課題というわけではなく、導入するにあたっての非常に大きなデメリットになるかなというところです。南山大学は一括でやりましたので、ある種それが自然な形で現在運用されていると個人的には思います。

また、神戸大学の例と同じく、第４クォーターの履修数が当然データ的にも少なくなっています。この辺りは学生の履修行動との関係で、第１、第２クォーターで頑張って取り、第３クォーターもできるだけその年の間にきちっと確保して、第４クォーターを休みたいという、そういう保険を掛けるという行動にどうしても陥ります。それがいいか悪いかは置いておくとしても、教員としては、第４クォーターはやはりあまりやりたくないと思う要因は多い。そういう意見も聞くことがあります。このあたりは課題かなというところです。

そういう意味では、クォーター制はいろいろと活用でき、柔軟性も持たせながら、プログラムの良い部分を実現させる非常に意味のある制度かなと思います。

学生の自主性、独自性を促進することになりますので、サービス的には非常に向上するものかなと思います。そういう意味でも柔軟性というのはやはりこのクォーターに関わる非常に重要なポイントかなということです。

ただ、単なるこの四つに分割するということだけでは難しい、意味がないので、やはり学生にとってわかりやすい、快適な学位プログラムをどう構築できるか、この二つはある種相反するところがありますが、クォーター制のメリットをより活かしていくには、このあたりをどう結びつけていくのか、今後の南山大学の課題なのかなと思っています。

以上で私の報告を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

ターム制の可能性と課題

パネリスト
近田　政博 氏・岡田　悦典 氏・和田　健
小泉　佳右（千葉大学大学院国際学術研究院　准教授／全学教育センター）

モデレーター
縣　拓充
（千葉大学大学院国際学術研究院　特任講師）

○縣　それではプログラム後半として、本日いただいたご講演と事業報告の内容を総括して議論するパネルディスカッションを開始したいと思います。テーマはターム制の可能性と課題についてとしていますが、多様な方向に話が広がるのではと思っています。

パネリストにはご講演をいただいた神戸大学の近田先生、南山大学の岡田先生、本学の和田に加えてII-BEATのカリキュラムの中で事業を行っていく立場から国際教養学部の小泉先生にもご参加いただきます。モデレーターは私、縣が務めさせていただきます。ディスカッションの冒頭ですが、まず、他の先生方の発表をお聞きになっての率直な感想や、ご意見、あるいは追加してお尋ねになりたい疑問点等をいただけたらと思っています。

始めに、ここで初めて登壇される小泉先生から、小泉先生はII-BEATの新しいカリキュラムの中でギャップタームを積極的にご活用いただいていますが、カリキュラムの中で教育を実際に行う教員としての立場からコメントをいただけたらと思います。

週２回開講授業の教育的効果

○小泉　千葉大学の小泉です。よろしくお願いいたします。近田先生、岡田先生、本日はどうも貴重な発表をありがとうございました。

私は一教員として、学生に対する教育効果がやはり一番重要であると思い、その中でこういったターム制をどのように活用していくかをたくさん考えてきたつもりであります。一方で、今日の近田先生、岡田先生のお話の中で、その教育効果だけではなく、全体的・組織的な問題点を改めて考えさせられるような場になっていたかと思います。とりわけ近田先生のお話ですと、全学的にどうやって合意形成をするのか、そこはすごく難しいというお話がありました。一方で、岡田先生のお話では2017年に全学的に（クォーター制を）導入し、対照的にすごくうまくいっているという印象も持ちました。その辺りは非常にコントラストがあって、これから、できるだけどういう違いがあったのかについてご質問させていただければと思っております。まず、そこのコントラストも気にはなっているんですけど、やはり私自身はこのターム制の導入で、どうやれば学生の教育に効果が見られるかに非常に興味があります。とりわけ、週２回開講に教育的な価値を見出せるというようなことも従前から言われておりますが、いま一つその辺りがはっきりしてないかなと思っております。

もし南山大学さん、神戸大学さんの方で、その週２回開講が効果を高めたという事例があれば教えていただきたいと思います。これは私もやりながら、全ての科目に該当するものではないと思っておりますので、こういう性質の科目の、こういったところに週２回開講のメリットがあるというところをぜひ教えていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。
岡田先生、まずお願いしてもよろしいでしょうか。

○岡田　はい。なかなかね、具体的事例というのも、個別の、個々の学生のケースを見ないといけないと思うので少し難しいところもあると思うんですけど、量的な何か測定をしているわけでもないもんですから、そういうところはありますけども。一例として、私が指導した学生に、単位の履修、成績も厳しい者がいたんですけども、それがクォーターになってから非常に単位の履修状況が良くなったという事例があります。それも一例ではあるんですけども、やはり非常にきちっと学び続けることができる学生にとっては、おそらくセメスターもクォーターもさほど違いがなかろうと思うんですけども、セメスターに合わないという学生に関しては、単位のタームが短くなるものですから、集中して定期試験の準備ができます。特に本学の場合は定期試験が非常に重要なものですから、そうすると量的にもしっかりとでき、かつ一般的には高等学校までの学習プロセスと基本的に変わらなくなるんですよね。そういう意味での効果もあるのではないかなと思います。
一方で、非常によくできる学生さんにとっては、おそらくそこを柔軟に対応できるのであれば、さほど違いがないのかなという気もします。あくまでもそういう１ケースの話なので、量的な証拠にはならず申し訳ないですが。

○小泉　ありがとうございます。大学に来る習慣がつきやすくなるというような、そういった意味合いでも取れるということでしょうか。

○岡田　当然そうですね。これも大学の特性にもよると思うんですけども。私は国立大学に勤めていたこともありまして、そこから南山大学に20年ほど前に移ってきたんですけども、非常に真面目に授業に出る大学、学生が出るような形態、ちょっと世代もだいぶ変わってきているところもあるんですけども、クォーターになれば当然授業に出ないと、という動機づけというんですかね、それが強制的になるかどうか、話は別ですけども、そういう意味ではPDCA、いわゆる自己のPDCAサイクルですかね、振り返りも含めてしやすくなるというのは明らかにあるかなと思うんですね。だから、第１クォーターでいまいちうまくいかなかったとしても、第２クォーターをもう少し頑張ろうという話になってきますので、そういうチャンスが年に４回ありますので、そういう意味での効果もあるかなと思います。

○小泉　はい、ありがとうございます。近田先生、いかがでしょうか。

○近田　ごめんなさい、神戸大学は残念ながらセメスターに戻してしまったわけですが、週２回開講のメリットというお話で、導入する段階で広島大学からいろいろなお話を聞きました。これは、広島大

学の教育本部の吉田香奈先生の受け売りなんですが、やはり３時間、４時間集中してみっちりできると。それはただレクチャーをやるだけではなくて、レクチャーをやりながら演習的なこともやり、さらに振り返りもやって、そういう多様な教育学習形態を組み合わせることで、かなり密度の濃い３時間４時間というものを実現することができるだろうと伺っておりました。それは、実際にそういった意見も神戸大学の中でございました。

私も、これは大きな可能性があると思っております。ただやはり難しい点もあって、例えば２コマ連続開講にした場合に、短く見積もって３時間、長く考えると４時間近い長い時間をハンドリングするそのスキルが教員側に求められているわけでして、３時間４時間という時間を学生に飽きさせることなくハンドリングするには、それなりの教員側にも力量が求められることになろうかと思うんですね。それから、大学設置基準との関係があるんですけれども、いわゆる大学の授業時間の２倍の課題、予習復習が必要だという理屈がございます。したがって、今の通常90分の授業をやる場合ですと、２時間とみなすと４時間分の予習復習が必要になるという建前がございます。これをまともに援用するとですね、もし２コマ連続とか、あるいは週２回開講でやる場合は、毎週８時間相当の、つまり一つ90分間、２時間とみなすと４時間分の予習復習が必要になります。それがさらに２コマ、週２回ということになりますと、８時間分の予習復習時間が必要になるという理屈になります。これを実現するのはかなり至難だと思われます。つまり、大学設置基準の、今言われているかなり無理な側面がより顕在化しやすいため、学生が寝る時間がなくなってしまうようなことをやらないと、表向き上のその予習・復習時間が確保できなくなるという意味では、その問題がより出やすいと思います。だから、一長一短だろうとは思います。

○小泉　学生に対する負担と、教員もそれをハンドリングするというのは確かにおっしゃる通りかなと感じました。ありがとうございます。

○縣　今の週２回開講というところで、私が前職で東北大学の高度教養教育学生支援機構という全学の組織におり、そこでも週２回開講が試験的に導入されたことがありました。その際、授業外の学習時間が増えたかということが実際に検証されたものの、その部分ではあまり効果がなかったという結果だと記憶しています。その理由としては、まさに今、近田先生がおっしゃったことに関連しますが、週２回開講だとなかなか予習復習が間に合わないという状況があったと。

ただ、南山大学のケースと比べてみますと、南山大学というのは週２回開講の授業が中心になっていますよね。そうすると、同時に履修する科目が結構絞られてくると思います。それに対して、基本的に週１回の授業の中で、一部だけ週２回授業のような状況だと、同時に履修する授業がたくさんあるにもかかわらず、一部だけ速いリズムで学んでいかなければならず、それは難しいと考えられます。ですので、やはり週２回開講となると、同時に履修する授業を絞り込むところもセットにしていかないと難しいだろうなと聞いていて感じました。

では次に、和田先生の方から全体を伺ってみて、聞いてみたいポイントについてお願いできますでしょうか。

ギャップタームの活用

○和田　そうですね。こういったクォーター制やターム制をやる第一の目的は、やはり僕はギャップタームだと思うんです。要するに、学生が自由に、ある程度カスタマイズできる時間をどう設定するか。もちろん、これは設定することによるメリットと、想像がつくようにデメリットもあります。本学の場合は、それは留学に充てる以外に、いわゆる学外での実習を入れるような、いろいろなコンテンツを用意することを国際教養学部ではやっています。先ほど私も報告しましたように、小泉先生は特別プログラムのような形で実験をある程度テーラーメイドで学生にやっています。どうしても工学部、理学部、文学部と違ってディシプリンベースの学部ではない分、やはり足りないところがあります。そういったところをギャップタームで入れていこうというのがこのII-BEATの狙いではありました。神戸大学の今回の事例も学部によって違うと思いますし、南山大学の場合も複数の学部によって違うと思うんですが、そのギャップタームをどのように学生に指導をしていくか。千葉大学の場合は全員留学という部分もあったので、考えないといけないなというのはあったんですが、南山大学、神戸大学の方でどのようなギャップタームにおけるカリキュラム的な政策があるかをご教示いただければと思います。

○近田　それでは、これは私から申し上げてもよろしいでしょうか。今の和田先生の話は全く賛同いたします。おっしゃる通りかと思われますが、いわゆる学外実習のプログラムと抱き合わせて導入することで、学生はギャップタームをうまく活用して、時間をうまく使えるようになるんだろうと思うんですけれども、それは千葉大学さんでいう国際教養学部はそれはもうマストなので、学生はやらなければならない状況にあり、おそらくうまくいくのではないかなと思います。
他学部を巻き込んだときにどうか、という難しさがおそらくあるのかなと感じました。神戸大学も全く同じでして、国際人間科学部という新学部、ここは全員留学をするという仕組みになっておりますが、そうでない学部、例えば工学部なども全部巻き込んで、一旦クォーター制を導入したんですけれども、そうすると工学部が１学年600人いる中で、どのぐらいの学生が留学や学外実習インターンシップに行くのかを見たとき、大半の学生は遊んでしまったということがありました。
運転免許を取ったり、旅行に行ったり、アルバイトに行ったりして、なかなかうまく有効な実習学習活動に繋がらなかったという反省がございました。つまり何が言いたいかといいますと、全員必ずこれをやらなければいけないんだという仕組みを作って、学外実習と組み合わせればうまくいくのではないかと思います。そうではなく、ただギャップタームだけを設けてあとは自分で考えなさいというふうにやると、海外留学や海外体験など、特にそういったことに特段の関心がない学生もおそらくたくさんございますので、遊んでしまう可能性があるだろうと思われます。どこまでマストにしていくのかによるのかなと感じました。

○岡田　はい。南山大学の場合、先ほど少しお話をしましたように、第２クォーターを有効活用するという、一応のポリシーのもとで作ったんですね。それこそ、国際教養学部などは第２クォーターに全員必修でアメリカの大学に行くプログラムを履修するようなことをやっていて、ある特定の科目を用

意してそれを必修化するというような形でしょうかね、そういうことをやっています。
あとは一方で、外国語学部などでも留学のような形のことをやり、他の学部ではインターンとか、そういう可能性ももちろん出てくるかなと思うんですね。一応そういう発想があって導入したりはしているんですけども、ただちょっとそこまではなかなか本学の場合は十分に出せていないかなというところです。結局のところ、例えば学部の１学年に200人、300人といるところ、その大部分がそういうものに関心があってパッといけばいいですけども、やはり大多数の学生はなかなかそうはいかないですよね。そこが多分一番難しいところで、一定のその枠づけもしてしまうことが非常に重要なポイントかなと思うんですね。その中でキャップや制度的にやってしまうというところにやはり尽きる。必修化などに尽きるのかなと思います。しかし、本来的にはそれと同時に少し柔軟に、学生にとって生活スタイルというんですかね、キャンパスのスタイルのあり方はそれぞれあるという観点からすると、より自由に取りやすくする道を用意しておくという意味合いとしては、良いかな。
例えば、非常に病気がちで、例えば第１クォーターを休学したいとすると、その部分は履修せずに第２クォーターで（履修）という形にももちろんできますし、そういう個々の事情で自由度が上がることを理解することになろうかなと思います。

○和田　ありがとうございます。いろいろな例を少しずつ広げていきながら、ギャップタームを学生がどう捉えてくれればよいのかなという、サジェスチョンが大事なんだろうなと思います。少し関連して、私の方からお話させていただければと思うんですが、II-BEATという事業をやる前、国際教養学部ができた頃から、ギャップタームは用意していました。そのときに１期生が「留学をしたら４年で卒業できないのではないか」という質問をしてきました。そして、親御さんにも「４年で卒業できないということはないですよね？」と言われました。私は学務委員会のメンバーだったんですが、基本的に４年で留学をした上で卒業できる仕組みというのはどういうものかいくつか考えていって。一応、AC期間は終了した形になりますが、そのときにキーになったのはやはりギャップタームでした。ギャップタームを作るということでターム制なんですが、同時に必修科目をあるところに集約する必要があったので、ここをどう乗り切るか、対応するかを考えた場合、留学のプログラムは多様で、特定の時期しかないというわけではないのですよね。その中で、必修科目を集約したタームをできるだけ外しながら組んでいくカリキュラム指導をすることで、何とか４年間で卒業する形を作りましたが、結果的にその「卒業できないんじゃないですか」と言った学生は、留学をして新たな発見をしたので積極的に留年していきました。
私は留学をするということは、留学したから留年ではなくて、やはり積極的にもう１年学生をやろうという留年であってほしいと思うんですね。そのときに、やはり集約するタームとギャップタームとをどう考えていくかは大事だと思いました。ただし、これは学部によっては難しいと思います。はっきり言って僕の印象なので、より深く考えないといけないんですが、工学部への導入は難しいなと思いながらも、ある学科だったらいけるのではないかということもあれば、本当に最低限、あるいはそれさえも難しいところもあるし、教育学部と医学部のように本当に難しいところもあります。ただ、今までのカリキュラムを見直していくときに、国際教養学部では、このターム制で一つスペースが空く授業期

間を何か作れないかなということはしやすかったんですが、そうではない学部にどう提案していけるかというのは悩みがあり、今回こういうシンポジウムで先生方にお願いしたというところであります。話はそれましたが、私からは以上です。ありがとうございます。

学部・学科の違いによる制度の導入難易度

○縣　はい、今、和田先生が最後におっしゃっていたことの関連をぜひ近田先生、岡田先生にお尋ねしたいと考えていたんですが、学問分野によってターム制が馴染むところ、馴染まないところがあるだろうと思います。看護系のように資格系の学部で、必須の授業が多いところでは、結局セメスターで組まないといけないという実情もあるかと思いますし、そういうものでギチギチになっているとギャップタームをなかなか入れ込めないというところもあるかもしれません。
その辺りで、神戸大学さんや南山大学さんの中で、学問分野によってここは難しい、ここはこのような課題があったなど、ぜひ学部や学問分野での事例がありましたら、ご紹介いただけますでしょうか。

○近田　はい、わかりました。今のご質問ですと、やはり元々のカリキュラムの積み上げ方が割と過密な学部、具体的には医学、医療系の学部、それから工学部はもう１限から４限までがっちり入っていて、必修科目が多いですよね。共通教育のとこは比較的まだよいのですが、元々そこまでの柔軟性がカリキュラム上になく、共通教育が終わり、専門教育に入ってしまうと、もうガチガチになっていると思うんですね。そういったところにギャップタームを無理やり導入すると、他のタームのカリキュラムがさらに過密になってしまい、何のためにこの期間を空ける必要があるんだと、逆に言われてしまう恐れがあるかと思います。それは何のために、つまり、医学系や工学系の学生にとってギャップタームをやることにどういう意味があるかを説明する必要が出てくると思いますし、そうでなければ、全学部一斉に必ずギャップタームを設けるんだと足並みを揃えるべきなのか、各学部の判断でいくべきなのか、というご判断が、もしかしたら必要になるのかなとも思いました。
神戸大学の場合は、全学部一斉ではやらずに各学部の判断に任せたんですが、やはり最初に工学部は、クォーター制には非常に前向きで積極的に乗ってくださったんですが、結果的にあんまり多くの学生が海外留学に行かなかったため、元に戻してしまったという反動がありました。そういったことを考えますと、どこまで網をかけて一斉にやるべきなのかという、その判断が難しいのかなと思います。

○岡田　南山大学の場合は今挙がっているような、工学部や看護系の学部、医学部はないので、その意味ではある種、各学部導入しましょうかという形で合意して一緒に導入したのは、学問領域的な、カリキュラム的な部分での抵抗があまりなかった、そういう分野が揃っていたのかなと今この場で思いました。
唯一、法務研究科ですね、法科大学院、こちらはセメスターのままです。当初からセメスターでやるのが当然であるとのことで、これは院試へのフォーカスや、司法試験に合格していかなくてはいけないという、ビビットな成果が求められているところもあり、いろいろな事柄が関係してセメスターの

ままで今に至っているんですね。これを変えようということもおそらくない。そのため、特に資格系ですかね、全くなじまないと即断するのもどうかなという気もしますが、やはり資格系の学部については、南山大学では比較的そのままセメスターという形にしているのが現状です。

○縣　どうもありがとうございます。少し関連して、今のお答えの中で南山大学の岡田先生にもう一点お伺いしたいと思ったのが、近田先生のお話の中でやはりまず全学的に取り入れる際の反発がかなり大きかったという話です。南山大学の週２回開講、これを導入するのは大きな抜本的変化だったと思うんですが、そのあたりで資格系の学部があまり多くなかったとはいえ、結構な反発があったのではないかと何となく予想されてしまいますが、どうやってその中これを実現できたんでしょうか。また、逆に難しかった点はあったのでしょうか。

○岡田　そうですね、あの当時、本当にターム制になって大丈夫なのかと試行錯誤していた感じではあったかと思うんですが、やるんだったらやりましょうかという形で、特に法学部に関して言えばクォーター制をせっかくやるのであれば、より良いものにできないかと、カリキュラムを寄せたりする形で対応した記憶がありますね。反発というか、いろいろな意見があったのが事実ではあるんですが、そういう流れがある中で、やれるんだったらやりましょうという、そういう発想でした。当然、第２クォーターに留学などを促進すると、第１クォーター、第３クォーター、第４クォーターで、６月、７月、８月と学生が逆にいなくなって遊ぶ学生が多くなるんじゃないか、それはそれで非常に大きな問題ではないかと意見する声も多かったですね。ですが、それも結局のところ、学生は第１、第２、第３（クォーター）と順々に履修するものですから、現実的にはそういう特色を持つといっても一部の学生のことであったり、それぞれの特色に合ったプログラム持っている学部であったりということだろうという、そういう部分の柔軟性もあったかなと思うんですよね。そのため、仮に導入するとしても、比較的各学部、クォーターという枠組みを置きながらも、柔軟にできるようなこの枠組みを作ったというんですかね。成績評価なども、当然、神戸大学さんの方は第１クォーター終了後すぐ評価するという形にしていたということですが、南山大学の場合には、まずそれはほぼ無理でしょうとある種政策を決定して、クォーターで対応をしなかったんですね。第２クォーターをやっている間に成績をつけるなんて、無理に決まっていますという話になり、逆に言うと実行可能性のようなものもそこで模索しつつやっていたのもあったのかなと今は思います。そのため、仮にクォーター制を導入するとしたとしても、柔軟性と言うんですかね、そういうものを持ちながらやっていく、その特性に応じるところが必要なのかなと思いました。

消極的な学生に対しての教育効果

○縣　どうもありがとうございます。もう一点、私の方からお尋ねしたいと思います。事前にあまり想定してなかったんですが、週２回開講ですとか、クォーター制にしても教育効果の議論というところで、授業をドロップアウトしがちな、低空飛行しているような学生が切り替えやすいという効果は

事前に考えておらず、そういう声が上がってきたのが結構意外なところでして。というのも、このII-BEAT事業の評価の中で、このようなギャップタームなどのカスタマイズを学生の側に委ねるカリキュラムは、向上心が高い学生に関してはどんどん積極的に活用できるだろうけれども、そうではない学生にとっては、遊んでしまうなどで、なかなかついていけなくなってしまうのではないか、そういう割合が高まるのではないかという議論がありました。その点で、教育効果という部分で、なかなか授業についていけない、ドロップアウトしがちな学生への効果や、そのような学生にとっての影響という点で、もしこのクォーター制の導入が、良い面・悪い面を含めて影響があったという事例がありましたら、お聞かせいただけたらと思います。いかがでしょうか。

○近田　そうですね。例えば学生の出席率、授業の出席率がクォーターによってセメスターの時代と比べて変わったかを考えてみますと、あまり変化がないと感じています。正確な出席率は取っておらず、データとしては無いんですが、ただクォーターになるとサイクルが早くなりますので、遊べない、かなりくるくるくるくる早く回っていくことが実感としてあります。そのため、中だるみできなくなることは、確かにおっしゃる通りだと思うんですね。ただ、逆に言うと中だるみできることも一つのメリットなのかもしれません。セメスターの中だるみできるというのもある種のゆとりなので、途中で中だるみできるといろいろな調整ができるわけですよね。海外出張の途中で学会発表が入っても対応できるかもしれないし、風邪で１回ぐらい休んでも対応できるかもしれないし、その遊びの部分が比較的あるんですが、クォーターになるとそこが無くなるので、かなり緊張した早い状態でサイクルが回っていくことになります。そのため、それがいいかどうかは一長一短かなと思われます。

○岡田　今の趣旨から、より広い、大学の制度になってしまうので少し恐縮なんですが、私はクォーター制を導入してからすぐ、学生部長という全学の役職をやっていました。南山大学の場合、このときに実感したのが、明らかに休退学の数で、小刻みな休学が増えたんですね。退学してしまうともう駄目なんですが、休学です。だから１クォーター、最終的に休学してしまうと翌年の秋の卒業になってしまいますので、その分ももちろん伸びてしまいますが、そういう意味での学生にとっての事情を勘案する形ができるように、より小刻みな休学が増えたというのは事実ですね。

休学しないまでも、やはり第１クォーターで、実は十分に大学へ行けなかったというパターンでも、第２クォーターでリカバリーしようという形になります。この上限の幅の中で、第２クォーターで履修を少し多めに取ることもでき、そういう意味でのリカバリーができることになるんですよね。これがセメスターになると、やっていたものが第１クォーターで駄目だと、残り半分しかないという話になるので、これは四つに分けることでそういう意味でのメリットは確実にあるはずなんですね。それをうまく制度設計するかどうかがポイントなのかなとは思います。

もちろん、非常に多くの人がそうやっているわけではない。現実の学生は、マジョリティーは普通にどんどん第１、第２、第３クォーターと履修していきますので、先ほど言ったように早々に履修しちゃうんですよね。履修していって、第４クォーターはゆっくりとしようみたいな話に、なってくるわけです。もちろん、そうではない人もいる、そういう意味での柔軟性が出てくると言えるかなと思います。

○縣　どうもありがとうございます。切り替えやすかった、リカバリーのしやすさが、クォーター制に伴うメリットかなと理解しました。

○和田　千葉大の学内の方も結構聞いていらっしゃるので、私の方から申し上げたいと思うのは、あくまでも国際教養学部で集約的なタームとギャップタームの実践をやっていますが、全学部にそれを強制的にやろうということは一切ないんです。正直なところ、ギャップターム、クォーター制の良いところと、困るなというところは半々ではなくて、やはりセメスターの方がいいよね、というところもどこかにあったりします。しかし、ターム制、クォーター制の良いところも実践してみてよくわかりました。これは、明らかに学部によってカスタマイズしなければいけないものであるし、選択肢としてカスタマイズしないという選択肢もあると僕は思っています。
そのため、学事暦の柔軟化をどう捉えるかだと僕は思います。良い機会だから、そういう柔軟な部分をマイナーな形で入れていくこともあっていいと思うし、やはりこれはできないよというのも一つの結論だろうと思います。このシンポジウムは全学FD研修会も兼ねておりますので、そういう意味では、11学部になる千葉大学の中、それぞれの学部に合った６学期制を考えていくというメッセージを、一応実務の取りまとめの立場から出しておきたいと思います。いろいろな長所・短所が南山大学、神戸大学の事例でよく理解できた部分もあるので、それを援用していきたいなと私自身は思っています。

全学教育におけるクォーター制

○小泉　私は、普遍教育センターという、教養教育を担当している組織にも所属しておりまして、近田先生に、神戸大学の全学教育ではクォーター制を残し、ほとんどの学部学科でセメスターに戻しているとのことですが、そこの経緯について、なぜそういう形で今運用しているかについて、少しお伺いしてもよろしいでしょうか。教育効果の観点なのか、そうではなく別の理由なのかをお聞かせいただけますでしょうか。

○近田　それは、学部がセメスターに戻したのはなぜかという意味でしょうか。それとも全学教育がクォーターを維持しているのはなぜかということでしょうか。

○小泉　はい、後者の方です。

○近田　後者の方ですか。全学教育がクォーター制をずっと維持している一番大きな理由は、非常に所帯が大きいといいますか、１学年2,500人の学生、２学年で5,000人の学生が受けるということで、科目数や関わる教員の数も非常に大きく、一部局とは規模が違うので、それをまた組み直して制度設計をするのがものすごい労力だということが一番大きな理由だと思います。
つまり、その変えるための労力と、維持するのにかかるコストとのそのバランスを考えたときに、今これを変えるよりも、今のところ全学教育はこれを維持していこうということで、積極的にその

クォーターを強く評価しているわけでは必ずしもない。それを変えるために、また莫大な労力を必要とするから、あえてそこには労力を投入せずに、全学教育のカリキュラム改革を進めているので、今はそちらに注力をしようと。カリキュラムの建付けをどうするかを今は重視してやっております。
逆に今、クォーター制をいじってしまってそれを崩すと、またぐちゃぐちゃになってしまうので、エネルギーを、労力をどこに注入するかという問題かと思います。各学部の方は、元々クォーター制を導入することに非常に反対意見も根強くあったんですが、それを蒸し返して元に戻してしまったという面もあったんです。そのため、クォーター制に積極的だった学部と消極的だった学部とが両方あったんですが、どちらかというと消極的な学部はその揺り戻しが起きました。しかし、全学共通は、ある意味では教育担当理事の直轄の場所ですので、そこはクォーターが今でも守られているわけで、それを変えようとすると莫大な労力がかかるということが一番大きな理由だと思います。

○小泉　ありがとうございます。その問題意識というか、問題の強さも全学共通の方ではそれほど声が上がらないということでよろしいでしょうか。

○近田　声は上がっております。

○小泉　そうなんですね。

○近田　なぜ声が上がっているかと言いますと、全学共通は一つのクラス当たりの学生数が大きいんですね。学部の専門の授業、例えば国際教養学部ですと一番大きな授業というのは１クラス何人ぐらいになるんでしょう。
神戸大ですと最大200人になるんですが、正直に申し上げて神戸大学は導入するときにやはり読みが甘かったのは、その200人規模の授業を何コマ担当しているときに、そのクォーターで維持できるかというコスト計算が十分にできてなかったんですね。それは先ほど岡田先生がおっしゃったように、私立大学の場合ですと、少なくともその大規模の100人200人なんて、大したことない規模ですね。それを少なくとも週６コマぐらい持って、回していくことがある意味でデフォルトになっていますから、それがもう回っていくのかどうかは最初に計算されていたと思うんですが、神戸大学は恥ずかしながらそこの計算が十分ではなかったということがありました。
したがって、今でも全学共通に関していうと、クォーターで回していくことがやはり大変な面についての意見はあるんです。あるのですが、同時に外国語科目などはクォーター化したことで非常にモジュールがはっきりした。単元目標がはっきりして、８回になったことで授業として進めやすくなったというプラスの意見もたくさんあるんです。したがって、全学共通に関して言うと、肯定的な意見と、かなりしんどいという意見が相半ばする状態でありまして、どちらが多いとも言えない状況であります。

○小泉　ありがとうございます。

○岡田　今の話の続きで少しお話させていただくと、今から振り返ってみると、南山大学の場合にはコマ負担が、一応教授だったら５というルールがあるんですね。実際、私立大学でそんなにたくさん、10も20もあるという大学ではないんですね。先ほどのお話の通り、要はセメスターの学生が例えば１週間に８つの授業を取る。それがずっとセメスターで続いて合計で８×４、32回みたいな形になるのが、要はそれが分割されて、それぞれ８単位を取る。要は分割されて、かつ学生が部分的に、同じような量で、ケーキを１個をいっぺんに食べるか、半分ずつ食べるかということなんですよね。それに応じて教員が授業を負担するので、若干のクォーターごとの微増はあるのですが、そういう部分での変化があまりないという印象なんですね、南山の場合。そのため、確かにそこで少し忙しくなったなど、いろいろな意見はあったんですが。だから、ある種劇的に変わったというよりも、さほどそこまで大きな変化だったとは、実感していないというのがあるかなと感じました。お答えになっているかどうかはわかりませんが。

○小泉　それは教養教育系も変わっていない、印象としては変わらないということでよろしいでしょうか。

○岡田　そうですね。逆に言うと、語学教育などは週２回、１週間に１回やるよりも週２回あった方が、教育的にはよろしいんじゃないかという発想の方が強いと思うんですよね。そのため、特段そこで、大きな隔たりというか、そういうものがあったという記憶はあまりないですね。

○縣　どうもありがとうございました。ここまでのところで、ターム制導入のメリットについて、各大学のいろいろな共通点が浮かび上がってきたのではないかと思います。他方で、教員・学生側のコストや、難しさのようなところも何となく抽出されてきていて、やはり全学展開というところでは、一括してというより、学部や専門性の特性ごとにそれに応じた柔軟性のある組み方をしないとやや難しいというところも、何となく見えてきたのではないかと思います。
まだまだ議論したいところはあるんですが、もう時間が来てしまいましたので、この辺りでクロストークは締めさせていただきたいと思います。

まとめ

○縣　最後になりますが、小澤理事の方から閉会の挨拶をいただければと思います。

○小澤　時間も押しておりますので、簡単にまとめをさせていただきたいと思います。大学ごとに、このクォーター制、ないしターム制の利用の仕方や、あるいはそれにあたり、抱える課題や問題点がそれぞれ異なるという点が、いろいろな形で明らかになってきたと思います。
これはそれぞれの大学の事情に応じて対処しなければいけない問題ですので、なかなかモデルになるような解があるわけではないということも重々認識したというところであります。
また、本日議論ができなかった問題があるかなと思います。一つは、やはり今回の議論ではコロナ前

とコロナ後というのを入れて考えなければいけないところがあったかなと思います。とりわけ、全ての教員がメディア授業の経験をしたことが、こういうターム制の運用や、週２回授業の配置の仕方、それからLMS（Learning Management System, 学習管理システム）の活用の仕方などに非常に大きな影響を与えていると思います。千葉大も、現在は７週８回という授業で運営しているんですね。１回分はオンデマンドという形にして、それで学事暦の窮屈さを少し緩和しつつ、ターム間で授業準備期間というのを１週間設けて、学生も教員も次のタームの授業準備を行うことができるという形を取っております。これもやはり、その全ての教員がオンデマンドの教材を作れる、そういう前提がなければできないことだったわけで、そういう意味ではコロナ後というのが大きな意味を持っていると思いますし、教育のDX化がこういう問題の中でどう反映していくかを考えていく必要があるだろうと思いました。これは一点目です。

それからいま一つ、これは非常に難しい問題なんですけれども、ターム制を導入した、あるいは逆でも構わない、つまりセメスターを継続している・セメスターに戻すでもいいんですが、このような学事暦の変更が学習成果にどう反映していくのか、そういう視点が重要かなと思います。

これをどう測定していくのかは非常に大きな課題です。千葉大学でもいろいろなツールを使ってそれを測定しようと試みたり、あるいはアンケート調査を行ったり、いろいろなことをやるんですが、やはりどうしても経験主義的、経験論的な感想というものの域を出ないところがあって、こういうものをどう、括弧付きですが、「客観的に」測定することが可能なのかについては、継続的に進めていきたいと考えております。

皆さん、いろいろな考え方があると思いますが、この点についてもそれぞれの経験を今後も交流して深めていただければと思います。皆様方の本日の様々な立場でのご発言に感謝を申し上げます。今後ともこういう形でいろいろな経験を交流しながら、全体として良い方向を目指していければいいなとに考えております。

本日はどうもありがとうございました。

○縣　小澤先生どうもありがとうございました。これで本日のシンポジウムは終了とさせていただきたいと思います。約２時間半にわたってのご参加、どうもありがとうございました。また、改めまして神戸大学の近田先生、南山大学の岡田先生、本日はご登壇いただきどうもありがとうございました。では、これでシンポジウムを終了させていただきます。皆さんどうもありがとうございました。

パネルディスカッションの様子

シンポジウムチラシ（参考）

INTENSIVE ISSUE
BASED
EDUCATION &
TRAINING
PROGRAM

文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業」千葉大学「インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開」シンポジウム／令和5年度千葉大学全学FD研修会

ターム制の効用と問題点
メリハリをつけた学期制の可能性

2024.1.17 Wed.

全国の大学でセメスター制（2学期制）に代わって
クォーター制（4学期制）が導入されるなど、
学期制に関してさまざまな試行錯誤が行われている。
千葉大学は、平成28年度にクォーター制に準拠した
ターム制（夏休み、春休みもタームと捉える6学期制）を全学的に導入し、
同年4月に新設された国際教養学部は、
ほぼすべての科目運営をターム制のなかで行っている。
また令和3年度より始まった「インテンシブ・イシュー教育プログラム」（II-BEAT）では、
集約タームとセルフデザインギャップタームを3年次で実施し、
メリハリをつけたカリキュラム運営を目的に進めている。
本シンポジウムでは、II-BEATで導入したターム制運営を示すとともに、
クォーター制を導入した各大学の実情報告と合わせて、
①留学、実習、実験などに参加しやすいギャップターム、
②集約的なターム開講のための週2回開講授業運営、
③ターム制の教員・学生にとってのメリットやデメリット
について考える機会としたい。

開催日時：　2024年1月17日（水）14:00-16:20
形　　式：　Zoomによるオンライン開催（参加無料）
対　　象：　大学関係者、高校関係者ほかどなたでも
申込方法：　左二次元バーコードもしくは下記URLより
必要事項※をご記入の上、お申し込みください。
前日までにメールでZoom情報をお送りします。
URL：https://forms.gle/ESdiCJEhxfKYxZGj7
※お預かりした個人情報は、本シンポジウムの運営業務以外には使用しません。

申込期限：　2024年1月11日（木）

主催：千葉大学国際教養学部「インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開」運営委員会
お問合せ：インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開事務室　e-mail：las-iibeat@chiba-u.jp

知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）　II-BEAT インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開 INTENSIVE ISSUE BASED EDUCATION AND TRAINING PROGRAM　CHIBA UNIVERSITY　COLLEGE OF LIBERAL ARTS AND SCIENCES

シンポジウムチラシ（参考）

文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業」
千葉大学「インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開」シンポジウム
令和5年度千葉大学全学FD研修会

ターム制の効用と問題点
メリハリをつけた学期制の可能性

14:00-14:15 開会挨拶・趣旨説明
小澤 弘明 千葉大学理事（教育担当）

14:15-14:30 事業報告
「国際教養学部II-BEATにおけるメリハリをつけたカリキュラム」
和田 健 千葉大学大学院国際学術研究院 研究院長・教授／国際教養学部長

14:30-14:50 講演1
「神戸大学における2学期クォーター制：導入のねらいとその成果や課題」
近田 政博 氏 神戸大学大学教育推進機構 大学教育研究センター 教授／教養教育院副院長
名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程満期退学、2003年博士（教育学）。名古屋大学教育学部助手、同大学高等教育研究センター講師、同センター准教授を経て、2014年より神戸大学大学教育推進機構教授。専門は大学教育論、比較教育学。主な著作に『知のリーダーシップ:大学教授の役割を再生する』（共訳、玉川大学出版部、2021年）、『研究指導』（編著、玉川大学出版部、2018年）など。

14:50-15:10 講演2
「南山大学のクォーター制：週2回開講授業の導入と運用、及びその教育効果」
岡田 悦典 氏 南山大学 副学長（学務担当）／法学部 教授
一橋大学大学院法学研究科公法・国際関係専攻修了、博士（法学）。福島大学行政社会学部専任講師・同助教授、南山大学法学部准教授を経て、現職。2023年より同大学副学長。専門は刑事法学、新領域法学。主な著作に『刑事準備手続論』（日本評論社、2022年）、『被疑者弁護権の研究』（日本評論社、2001年）などがある。

休憩10分

15:20-16:10 パネルディスカッション
「ターム制の可能性と課題」
Panelists
近田 政博 氏 **岡田 悦典** 氏 **和田 健**
小泉 佳右 千葉大学大学院国際学術研究院 准教授／全学教育センター
Moderator
縣 拓充 千葉大学大学院国際学術研究院 特任講師

16:10-16:20 閉会挨拶

II-BEAT
インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開
INTENSIVE ISSUE BASED EDUCATION AND TRAINING PROGRAM

千葉大学「インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開」
令和５年度シンポジウム報告書
ターム制の効用と問題点 ―メリハリをつけた学期制の可能性―

発行日　令和６年３月
編　集　千葉大学国際教養学部
「インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開」運営委員会
発　行　千葉大学国際教養学部
〒263-8522　千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33
URL：https://www.las.chiba-u.jp/
https://www.las.chiba-u.jp/II-BEAT/

CHIBA
UNIVERSITY

知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）
Human Resource Development Project for Supporting Knowledge-Based Society

II-BEAT